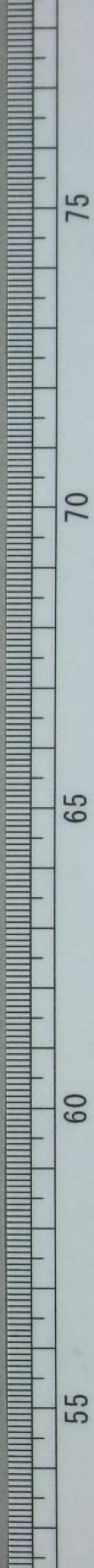




古事記誘導編

第  
番

リ 5  
5117  
1





英譯古事記誘導篇

上

木村一歩譯



り 5  
5117  
1-2

英譯古事記誘導篇



英譯古事記誘導篇

上

木村一歩譯



45  
5117  
1-2

248

藏島書田

6.12.23

英譯古事記誘導篇

著述アリテヨリ以來殆ト千二百年ノ間、日本ニ

出テタル群籍中ノ最モ緊要ナル者ハ古事記ナ

リ、近ク「アツカデ」ニ加「フ」ル者アリ、此「アツカデ」

テ「アツカデ」ニ加「フ」ル者アリ、此「アツカデ」

タ「アツカデ」ニ加「フ」ル者アリ、此「アツカデ」

土「アツカデ」ニ加「フ」ル者アリ、此「アツカデ」

日「アツカデ」ニ加「フ」ル者アリ、此「アツカデ」

書「アツカデ」ニ加「フ」ル者アリ、此「アツカデ」

ニシテ、古代日本ノ神傳、風俗、言語及ヒ傳説ヲ載

チャンパーレイ

藏島書田  
英譯古事記誘導篇  
著述アリテヨリ

スル<sup>レ</sup>ト他書ヨリモ誠實ナリ、實ニ此書ハ「チューラ  
ニアン」「サイヂヤン」「アルタイツク」等ノ異名ヲ以テ  
稱セラレタル一大人種ノ最舊典籍ニシテ、<sup>「</sup>ソ  
アリアン<sup>」</sup>印度ノ最舊典籍ノ現存セル者ニ比ス  
レハ、尚百年ノ前ニ在リ、蓋シ此書編輯ノ後幾年  
ナラスシテ、日本國風ノ踊躍發揚スル所ハ、支那  
ノ開化ノ煩重ナル壓迫ノ爲メニ湮滅ニ歸シタ  
ルガ故ニ、日本ノ事情ヲ考究スル者、今代日本ノ  
風俗思想ノ元ト唯鄰國ヨリ移リ來タリシ者ヲ  
看テ、其固有ノ者ト誤解スルノ弊ニ陥ル<sup>レ</sup>ト往々

之アリ、今此弊ニ陥ラザラン<sup>ト</sup>欲セハ、先ツ此書  
ヲ初トシ、其他萬葉集、祝詞等ノ二三書ヲ閱讀セ  
サルベカラザルナリ、  
固ヨリ古事記ハ支那ノ文字ヲ以テ記シタル者  
ナレバ、支那ノ感化ニ觸レズトハ言ヒ難シト雖  
モ、然レモ他書ニ比スレバ、其感化ノ度量更ニ僅  
少ニシテ、其性質モ亦異ナレリ、此書ニ載スル所  
ノ傳説及ヒ風俗ノ元ト古代日本人ノ固有ナル  
所ニアラスシテ、支那、印度ヨリ移リ來レル者ナ  
リヤ否ヤハ姑ク之ヲ論ゼサルモ、其撰者ニ於テ

ハ其日本ハ固有ト信スル所ノ者ヲ後世記者ノ  
風習ニ倣ヒ漢文ヲ以テ潤色スルハ弊習アルヲ  
視ザルナリ又一方ヨリ視レハ後世ノ歴史家ハ  
支那ト交際ヲ開キシ以前ニ日本ニ出テタル帝  
王英雄ノ言行ヲ潤色スルニ美麗ナル支那語ヲ  
以テシタルニ因リ大ニ日本庸俗ノ風致ニ適ス  
ル所アレハ此書ノ撰者ハ務メテ此潤色ヲ加ヘ  
ザリシヲ以テ大ニ其風致ニ適セザル所アリ然  
レハ歐羅巴學生ノ此類ノ典籍ヲ閱讀スルヤ嬉  
戲ノ為ニアラス事實ヲ考究スルノ目的ニ外ナ

ラザレハ必ス此書ノ如ク撰録ノ眞實ナル者ヲ  
好ムナルベシ況ンヤ日本ノ學士ノ泰斗ト仰ガ  
ル者皆此書ヲ以テ第一等ノ地位ニ置クニ於  
テヲヤ  
日本ノ事情ヲ考究スル者ノ為ニ古事記ノ至緊  
至要ナルトハ近年歐羅巴學士ノ能ク知レル所  
ナリ故ニ其學士ノ著書ヲ視ルニ古事記ヨリ抜  
譯セル一二ノ詞句處々ニ散見セリ即チアスト  
ン氏ノ日本文法書ノ附録ニハ有益ナル抜文一  
聯ヲ載セ本會事務録ニ印載シタルサトウ氏ノ

祝詞篇中ニハ時々其抜文ヲ載セ又ケムベルマ  
シ氏ノ獨乙東洋博物兼人種學會往復録ノ第四  
号ニハ一篇ノ論文ヲ掲載シ其文中ニ古事記ノ  
譯文ヲ載セザレモ亦古事記中ノ傳説ヲ推シテ  
以テ日本開化ノ淵源ニ係ルニ三ノ臆説ヲ立テ  
タリ然レモ今迄歐羅巴諸國ノ語ヲ以テ譯シタ  
ル部分ハ古事記全文ノ二十分ノ一ニ過ギス且  
其日本ノ事ヲ論ビタル書ヲ視ルニ古事記ノ体  
裁趣旨及ビ綱目等ニ就テ意見ノ謬妄最モ多シ  
今余輩ハ古事記ノ何物タルト古代日本人ノ傳

説風俗及ビ思想ノ何物タルト更ニ明瞭ニ了  
解セシメンコトヲ冀望シ爰ニ英語ヲ以テ古事記  
全部ヲ翻譯ス固ヨリ此譯書ハ歐羅巴學士ノ為  
ニ時々引證ノ用ニ供スベク又原書閱覽ノ際參  
考ノ用ニモ供スベキ一書ヲ備ヘ置クニ在レハ  
頗ル其文體ヲ嚴密ニシ一字一句モ原書ノ本文  
ニ違ハザルヲ目的トセリ然レモ本書翻譯ノ際  
ニハ東洋ノ古典ヲ譯スルニ當テ往々遭遇スル  
所ノ困難事ニ遭遇スルコトナキハ讀者ノ為ニ不  
幸ナリト雖モ此反譯ノ舉ノ為ニ幸ナリト謂フ

べし、若し原書ノ文體華美ヲ主トスルキハ、譯者  
ハ之ヲ保存セシムガ為ニ、幾分カ意義ノ曖昧ヲ來  
タスヲナキヲ免レ難シト雖、後文ニモ論スル  
ガ如ク、原書ノ文體ハ華美ヲ旨トセズ、其聲調奇  
怪無色ナレバ、之ヲ英語ニ譯シタル上ニテ、亦奇  
怪無色ノ聲調ヲ帶ブテアルモ、誰カ之ヲ非トス  
ル者アラシヤ、又原書中、猥褻非禮ノ詞句ノ如キ  
ハ、言ヲ待タズシテ明瞭ナル理由ニ因リ、英語ニ  
改譯シ難キ所アリ、然レモ此詞句ヲ羅旬語ニ直  
譯セバ、亦之ヲ非難スル者ハ、有ラザルベシト思

惟ス、

右序說ヲ畢ヘタレハ、是ヨリ古事記ヲ學ビ之ヲ  
英語ニ翻譯スルノ際、胸中ニ涌起セシ論項數條  
ヲ掲ゲ、序ヲ逐ヒテ之ヲ論述スルヲ最モ便利ナ  
ルベシ、其論項ヲ擧グレバ、則チ左ノ如シ、  
第一 原書ノ眞偽、其性質及ヒ諸本沿革ノ畧  
說、  
第二 譯例ノ詳說、  
第三 日本紀ノ事、  
第四 古代日本人ノ風俗及ヒ慣習、



第五 古代日本人ノ宗教政治ノ思想、日本國ノ起原及ヒ日本傳説ノ真偽

○第一 原書及ヒ其真偽并ニ諸本沿革ノ畧説

古事記序文ノ末段ニ原書編輯ノ由來ヲ記シ併ヒテ亦其趣旨ヲ述ベ其序ノ始メニハ高調ナル漢語ト精美ナル引説トヲ以テ起リ後ニハ專ラ事實ヲ主トシタル文體ヲ以テ序ヲ終ヘタリ然レハ尚其意義ノ十令ニ明瞭ナラザル所アレバ其編輯ノ由來ヲ平易ニ陳述シ歐洲ノ學生ヲシ

テ一層明瞭ニ了解セシメンテ緊要ナラン然レ

氏サトウ氏ノ真神道再興論本會事務録ノ中ニ

既ニ此事實ヲ記載シタレハ爰ニハ唯其文ヲ引用スルヲ以テ足レリトス曰ク

天武天皇(其御世ノ何年ナリシヤ詳カナラス)舊家ニ蓄藏セル所ノ記録ノ正實ニ違ヒ虚偽多クシテ真正ノ傳説ノ之ガ為ニ湮滅ニ歸セシメテ患ヘ諸家ノ記録ヲ採拾シテ之ヲ檢閲討覈シ其虚謬ヲ削除セリ是時天皇ノ家臣ニ稗田阿禮ト云ヘル人アリ此人聰明強記ニシ

テ一タビ看タル書ハ能ク之ヲ背誦シ一タビ  
聽キタル言ハ決シテ之ヲ忘失セザリシカバ  
天武天皇乃チ此人ニ教フルニ眞正ノ傳説及  
シ先代ノ舊辭ヲ以テシ其全部ヲ暗記スルニ  
至ル迄反復誦習セシム然レモ未ダ其事ヲ行  
ハズシテ蓋シ未ダ一部ノ書ヲ編輯スルニ及  
ハサルノ意ナラシ天皇俄カニ崩シ給ヒ爾後  
二十五年ノ間古事記ノ稱號ヲ得タル者ノ材  
料ハ獨リ阿禮ノ記憶中ニ蓄積セシガ此  
年ノ末ニ元明天皇安萬侶ニ勅シテ阿禮ノ誦

習スル所ノ言語ヲ記録セシメ僅ニ四個月半  
ニシテ脱稿シタリト云フ此古事記脱稿ノ時  
ニ當テ阿禮ハ何歳ナリシヤ詳カナラザレモ  
天武天皇ノ御世中ニ其年齢二十八歳ナリト  
記載シテアレハ此時蓋シ六十八歳ニ過ギザ  
リシナラシ又六百八十一年ニ天武天皇ヨリ  
修史ノ前勅ノ下リシト六百八十六年天皇  
崩御ノ時ニ親ラ古事記ノ編輯ニ從事シ給ヒ  
シトト此二事ニ由リテ之ヲ推セバ恐クハ同  
帝ノ末年ニ古事記編輯ノ勅諭アリシト断決

スルモ不可ナリトセズ若シ然ラハ七百十一  
年古事記脱ニ當テ阿禮ノ年齢ハ僅ニ五十三  
歳ニ過ギズ

右ノ校文ニ天武天皇ノ前勅ノ事ヲ記セリ通例  
ノ説ニ據レバ此勅ヲ奉ジテ編輯シタル歴史  
ハ幾クモナクハ失シタリト云フ然レハ平田氏  
ノ如キハ此勅ト古事記編輯ノ擧トハ一體一  
物ナルヲ論ジタリ若シ此説ヲシテ實ナラシ  
メバ古事記ハ名ノ今日ニ傳ハリタル歴史中ニ  
於テ第三等ヲ占ムル者ニアラズ第二等ヲ占ム

ル者ト為スベシ何トナレバ六百二十年ニ一部  
ノ歴史ノ編輯アリタレハ六百四十五年ニ至リ  
祝融ノ災ニ罹リテ焼失シタレハナリ抑前文ニ  
述ブル所ニ據リテ之ヲ言ヘバ古事記撰者ノ名  
ヲ負フベキ者ハ何人ナリヤ之ヲ指示スルヲ甚  
ダ難シ天武天皇稗田阿禮太安萬侶孰レモ皆撰  
者ノ名ヲ分有シテ可ナラン然レハ是レハ此レ  
余輩ニ取リテ緊要ナル論點ニアラス且説話中  
ニ阿禮ノ功勞ヲ説クヲ稍過大ナレハ唯此純粹  
ナル國史ニ天武天皇ノ御世ニ其修撰ノ計畫ヲ

始メ其嗣君ノ御世ニ至リ朝臣安萬侶ナル者遂ニ其事ヲ成功セシト思ハ、則チ過チナキニ庶幾カラシ

若シ此他ニ古事記ノ由來ニ就テ右ニ述ブル所ヨリ一層明瞭確實ナル證據ヲ搜索シ得ルヲアラハ大ニ人心ヲ満足セシムル所アルベシト雖氏當時讀書著述ニ従事スル者甚ダ尠ナク且殆ド之ト同時ニ頗ル能ク世ノ風致ニ適合セル歴史(日本紀)ヲ編輯スルハ擧アリシヲ以テ一層明白ナル證據ヲ得ルヲ甚ダ難シ然レモ日本ニ於

テハ近年ニ至ル迄全書ヲ偽作スルノ擧アルヲ聽カザレハ(本居氏ハ先代舊事記ヲ偽作ナリト説キタレモ)近世ノ學士中ニ之ヲ評シテ草卒ノ言ナリト云フ者アリ此書ノ眞書タルヲ疑フベキニアテズ且内部ノ證據事實ニ徴シテ証セスルヲ十分ニ其眞書タルヲ証スル者アリテ存セリ抑日本紀ノ朝廷ニ採用セラレシ以後ハ舊時ノ傳説ヲ漢文体ニ書スルヲ一般ノ慣習ナレハ若シ古事記ノ撰者ニシテ第八世紀以後ニ出デタリトセハ豈ニ能ク漢語ヲ以テ舊時

ノ傳説ヲ書スルノ風習ヲ脱スルヲ得ンヤ又能  
ク其著作ノ名聲ヲ博スルニ足ラザルガ如キ賤  
劣ナル文体ヲ以テ撰録スベケンヤ必スヤ古代  
日本ノ衆著述家ト一般ニ華美ナル漢文ヲ用ヒ  
テ編輯ヒシナラン(撰者ノ序文ヲ視ルニ若シ漢  
文ヲ以テ編輯スルノ意アレハ能ク之ヲ編輯シ  
得ベキノカアリ)若シ又既ニ國語ヲ以テ記シタ  
ル歴史ノ在ルアリト聞カハ日本ノ文体ヲ用ヒ  
日本ノ文法ニ從ヒテ漢字ヲ排列シ其助辭語尾  
ノ如キハ必ス之ヲ假字ニ寫シ、ナルベシ是レ

所謂ル祝詞ノ文體ニシテ後ニ一變シテ假名交  
リノ文体ト云ヘル思想ヲ寫スニ最モ便利ナル  
一文体トナリタル者ナリ然ルニ今古事記ノ撰  
者ヲ視ルニ左ハセズシテ漢文擬似ノ体裁ヲ用  
ヒ漢文ヲ以テ日本語ヲ寫スノ傍時々其体裁ヲ  
破壊シテ假字ヲ以テニ三ノ日本語ヲ寫シタリ  
然ラバ則チ此舉ヤ相反スル所ノニ元素漢文  
假字然ラバ則チ此舉ヤ相反スル所ノニ元素漢文  
假字  
ナ云フニ文体ヲ始メテ結合セントスル未熟ノ舉動  
ナリシト疑ハシ或ハ又假ニ古事記ノ撰者ニシ  
テ七百十二年ヨリ僅ニ百年ノ後ニ出デタリト

スルモ其古代ノ言語ヲ模擬シ又ハ想像スルノ  
此ノ如ク巧ナルトハ是レ亦理ニ於テ然ルベカ  
ラザル所ナリ何トナレハ第八世紀ハ實ニ日本  
語ノ一大轉換期ニシテ此頃中古日本語ナルモ  
ノト上古日本語ナルモノト交替シ爾後學者ノ  
注意スル所ハ獨リ支那ノ言語文學ノミナレハ  
上古ノ語勢ヲ知ルニ途ナカリシヲ以テナリ是  
故ニ第八世紀ニ在テハ歌人ニシテ古言ノ既ニ  
廢レタル者ヲ以テ其歌ヲ粧飾セシ者アルヲ視  
ズ斯ク其歌ヲ粧飾セシハ後世引用ニ供スベキ

書籍ノ多ク發兌セラレタル時ニ在ルノミ實ニ  
第七第八第九ノ三世紀間ニ於テハ其歌人ノ詠  
セシ歌ト其平生說話スル所ノ詞ト毫モ異ナル  
所ナキ者ナレハ萬葉集古今和歌集(第八世紀ノ  
史ト第十世紀ノ始メニ於テ勅諭ニ由テ編輯シ  
タルニ大歌集)ニ就テ其歌ノ年代ヲ調査セズ只  
其言辞ヲ檢閲スルノミニシテ以テ能ク其歌ヲ  
五十年ツニ分類セシテ敢テ爲シ難シトセザ  
ルナリ  
右ニ述ブル所ハ撰者カ古事記ヲ編輯スルノ際

其意義ヲ援助シ且其正音ヲ滅セザラント欲シ  
テ假字ヲ以テ寫シタル日本語(悉皆上古日本語  
ナリ)ニ就テ格別ニ適合スル者ト知ルベシ又古  
事記中ニ載セタル歌ニ就テハ或ハ撰者ノ製作  
ニ係ル者ナルベシトノ説アレモ之ヲ評シテ荒  
誕無稽ノ臆説ト云ハザルヲ得ズ何トナレハ七  
百二十年ヲ完成シタル日本紀中ニハ此書ノ歌  
ニ同ジキ者ヲ載スルト多ケレハナリ或ハ又此  
精細ニ假字ヲ以テ寫シタル歌ノ後ノ部分ハ第  
八世紀以後ニ係リ其前ノ部分ハ稍此時代ヨリ

早カルベシトノ説アレモ余輩ハ既ニ能ク日本  
語ノ沿革ヲ熟知シ又能ク第八世紀ヨリ今日ニ  
至ル迄ノ典籍ニ徴シテ其語ノ盛衰興廢ヲ推知  
シタレバ此説ヲ信スルト能ハザルナリ唯余輩  
ハ其歌ノ今體ノ者ヲ第六世紀ノ製ニ歸シ又其  
情味文體ノ古雅ナル者ヲ之ヨリ一二百年以前  
ノ作ニ歸スレバ則チ恐ラクハ推測ノ其當ヲ得  
タル者ト謂フベシ加之吾ガ此推測ヲ支持スベ  
キ事實ノ在リ何ゾヤ日本ニ於テ文書ヲ用ヒタ  
ルハ第五世紀ノ初葉ニ始マリタレハ夫ノ古代

ノ神祇英雄ノ作ナリトシテ貴重セシ歌ノ如キ  
モ、此時代ニ於テ始メテ之ヲ漢字ニ寫シ、其意義  
ノ了解シ難キ所ハ、傳説ノ儘ニ之ヲ謄寫シ、又其  
詞句ノ謬リアリテ且美ナラザル所ハ、之ヲ訂正  
セシナルベシト思考スルハ、是レ理ノ當然ナレ  
ハナリ、大要ヲ約シテ言ハシニ、日本ノ註釋家中  
ニハ、上文ニモ云ヘル如ク、其古代ノ史記ヲ駁撃  
シテ之ヲ偽作トシタル者アレド、獨リ古事記ニ  
至テハ、其眞偽ヲスラ疑ハザリシ、若シ果シテ古  
事記ニシテ、最モ誠實ニシテ最モ古キ書ナラズ

トセバ、近年古事記ノ党派ト日本紀ノ党派トノ  
間ニ爭論絶エサルヲ以テ、必スヤ其瑕瑾ヲ發見  
指示スル者アルベキノ理ニアラスヤ、  
中世ノ間ハ、日本書ノ刊行セシ者ナク、又漢籍佛  
典ノ外ニ刊行セシ書籍甚ダ多カラス、古事記モ  
亦謄本ノ儘ニテ神官輩ノ篋中ニ秘藏セラレタ  
リ、其後國家太平ニ復シ、讀書ヲ好ムノ風普ク行  
ハレ、日本ノ書籍ノ謄本タリシ者、漸ク上木セラ  
ル、ニ及ンデ、古事記ノ謄本ノ始メテ刊行セラ  
ル、者アリ、此板本ハ千六百四十四年ノ刊行ニ



係り、後又千七百九十八年之ヲ再板シ、古事記  
ヲ専門ニ學ブ者ノ為ニ最モ緊要ナル書ナレド  
世上ニ其書甚ダ稀ナリ、後又古事記ノ刊行セラ  
ル、者アリ、此本ハ千六百八十七年神官出口延  
佳ノ出板ニ係リ、其本文ヲ改正シタル所ハ緊要  
ナレド、其標註ハ緊要ナル所少ナシ、其前ノ板本  
ハ單ニ古事記ト號シ、通例之ヲ舊印本ト稱シ、後  
ノ板本ハ之ヲ鼈頭古事記ト稱シテ、各三卷アリ、  
其後ニ出ツル者ハ、本居氏ノ古事記傳ト稱スル  
卷帙浩瀚ノ書ナリ、此書ハ千七百八十九年乃至

千八百二十二年ノ印行ニ係リ、日本註釋書ノ巨  
擘ニシテ、全部四十四卷アリ、其十五卷ハ原書第  
一卷ノ註釋ニ係リ、十七卷ハ其第二卷ノ註釋ニ  
係リ、十卷ハ其第三卷ノ註釋ニ係リ、自餘ノ二卷  
ハ總論、目錄等ニ係レリ、此註釋書ハ尋常ノ學生  
ノ望ム所ヲ満足セシメ、且其文体華美麗艶ニシ  
テ、原書ノ涸燥セル部分ニ彩色ヲ加フル所多シ、  
然レド氏ガ神道者タルノ性癖ニ合ハザル意ニ  
解スベキ章句或ハ意義ノ最モ理解シ難キ章句  
ニ遭遇スレバ、徃々之ガ決斷ヲ誤ル者ノ如シ、又

氏ハ屢、其師眞淵氏ノ説ヲ引用シタレト云、此説ヲ述ベタル眞淵氏ノ自著ノ書、甚ダ世上ニ乏シク、今日一寫本ヲモ見ルヲ得ズ、又東京書籍館ニモ之ヲ藏セス、又此書ニ次デ刊行セル古事記ノ稍、緊要ナラザル書ヲ枚擧スレハ、古訓古事記ハ千八百三年ノ刊行ニ係リ、本居氏ノ一門弟ガ其師ノ古事記傳中ノ本文ニ師ノ訓ヲ附シテ再板セル者ニシテ、其題號ハ正カラザレト、亦参考ノ爲メニ頗ル有用ノ書ナリ、古事記標註ハ千八百七十四年ノ刊行、村上忠順ノ撰述スル所、假名古事

記ハ千八百七十四年ノ刊行、坂田鐵安ノ著述スル所ナリ、假名古事記ハ原書ノ本文ニ今代ノ訓ヲ附シ、隨意ニ美稱等ヲ訓中ニ挿ミ之ヲ以テ原書ノ本訓ナリト主張シタルヲ以テ、頗ル學生ヲ惑ハシムル所アリ、又校正古事記ハ千八百七十五年ノ刊行ニ係リ、植松茂岳ノ著述スル所ナリ、以上ノ四書ハ各々三卷ヨリ成レリ、又美麗ナル薄葉紙ニ摺リテ一冊ニ釘装シタル古訓古事記アリ、又千八百七十一年藤原政興ノ著ニ係ル神字古事記ハ、全部四卷ニシテ他ニ貴重スベキ所ナ

ケレト實ニ奇怪ナル書ナリ是ヨリ先キ或ル日  
本ノ著述家ハ一種ノ朝鮮假名ヲ以テ上古其國  
ノ神祇ノ用ヒタル文字ナリト爲シ之ニ附スル  
ニ神字ノ名ヲ以テセリ今此書ハ此神字ナル者  
ヲ古事記ノ今訓ニ從ヒ連綴シテ以テ一種ノ古  
事記ニ作りタル者ナリ

右ニ載セタル古事記ノ諸板本ノ外ニ之ト間接  
ノ關係ヲ有スル書籍アリ其數頗ル夥多ニシテ  
枚擧スルニ暇アラズ今其著名ナル者ヲ擧グレ  
ハ神代正語ト稱スル三卷ノ書ハ千七百八十九

年ノ刊行ニ係リ本居氏ノ著述スル所ナリ神代  
正語常盤草ハ細田富延ノ著述ニ係リ前書ヲ註  
解シタル者ナリ譯者ハ及譯ノ際說ヲ此ニ書ニ  
借ルテ勘カラズ又古史徵及ニ其續キ古史傳ハ  
千八百十九年ニ刊行ヲ始メ平田篤胤ノ著述ニ  
係リ言語學ノ上ヨリ見レハ殊ニ貴重スベキ書  
ニシテ本居氏ノ解スルト能ハザリシ難義ヲ解  
シタル所少カラズ又稜威道別ハ千八百五十一  
年刊行ヲ始メ橋守部ノ著述ニ係リ日本紀ヲ註  
釋シタル有用ノ書ナリ稜威語別ハ千八百四十

七年ノ刊行ニ係リ、亦橋守部ノ著述ニシテ、古事  
記及ビ日本紀ニ載セタル歌ヲ解スルニ補益アリ  
リ、又難語考（一名山彦冊子）ハ、千八百三十一年ノ  
出版ニ係リ、全部三卷ヨリ成リテ、殊ニ困難ナル  
詞句ヲ解釋シタル辞書ノ如クニシテ、難語及ビ  
新思想ニ光輝ヲ與フルト歎ナカラズ、又日本書  
記通證ト云ヘルハ、千七百六十二年、谷川士清ノ  
著述ニ係リ、全部二十三卷アリ、漢文ノ書ニシテ  
著者ノ辛苦想フベシ、爰ニ又厚顔抄ト云ヘル書  
ヲ附載セザルベカラズ、此書ハ日本批評家ノ祖  
トモ称スベキ、僧契沖ノ著述ニシテ、日本紀及ビ  
古事記中ニ載セタル歌ヲ解釋シタル者ナリ、固  
ヨリ歌中ノ疑件ヲ解キタル契沖ノ説ノ中ニハ、  
近年細密ナル註釋書ノ出デタルニ因リ、陳腐ニ  
属セシ者多シト雖、氏尚一ニノ解説ノ取ルベキ  
者アリ、（此書ハ千六百九十一年既ニ脱稿シタレ  
氏未ダ之ヲ刊行セズ）譯者ノ此書ノ反譯ニ從事  
スルヤ、以上載スル所ノ諸書、及ビ和名類聚鈔、姓  
氏錄（近代ニ至リ）東雅等ノ辞書、又ハ参考書等ヨ  
リ、補益ヲ受クルト最モ多シ、然レ氏此等ノ辞書

等ノ解義ノ説ハ本居氏ノ古事記傳中ニ大抵之ヲ引用シテ餘蘊ナキが故ニ一々其出處ヲ此書ノ脚註ニ載セズ又此等ノ参考書類ハ批評ニ從事スル歐洲ノ考究者ニ在リテ固ヨリ廢スベカラザル所ナレ氏草卒ニ其説ヲ信スベカラズ一々熟考比較スルノ後ニ非ザレハ信スベカラザルノ説多キヲ亦遺憾ト謂フベシ譯者ハ右参考書ノ補益ヲ受ケタルヲ謝スルノ外又稜威道別及ビ稜威語別中其未刊ノ部分ノ謄本ヲ借用セルトニ付テハ碩學橘守部ノ孫ナル橘道守氏ニ

厚謝セザルベカラズ實ニ此謄本ハ古事記本文ノ難義ヲ理解スルニ必要ナル書ナリ又日本植物名稱ニ對譯スベキ英語及ビ羅匈語ヲ知り得タルトニ付テハサトウ氏ニ厚謝セザルベカラズ又日本動物名稱ノ事ニ付テハ甲比丹ブラッキストン氏及ビ浪江元吉氏ニ厚謝セザルベカラズ  
以上述ブル所ト安萬侶ノ序文ニ述ブル所トヲ比較スレハ原書ノ性質ヲ理解スルト難カラザルベシ實ニ古事記ノ本質ニ就テ云ハシニ歌ノ

部分ハ所謂ル萬葉假名(即チ義ヲ示サス只音ヲ示スノ用ニ供スル漢字)ヲ用ヒテ語音ヲ逐<sup>レ</sup>テ之ヲ寫シ又其散文ノ部分ハ日本語ニ讀下シ得ベキ頗ル賤劣ナル漢文ヲ以テ之ヲ寫セリ(漢字ハ象形文字タルヲ以テ日本語ニ讀下シ易シ)又其散文ニハ日本語多キノミニアラス或ル日本語ノ適當ナル漢字ヲ以テ譯シ難キ者アレハ假名ヲ以テ其語音ヲ寫スニ因リ奇異ノ文字所々ニ散見シ若シ支那人ヲシテ之ヲ讀マシメハ本文ノ義理ヲ發見スル<sup>レ</sup>能ハザルベキ所多シ今

原書ノ本文ニ語音ヲ寫シタル文字ノ此ノ如ク多キヲ視レハ(假令ヒ序文ニ其畧説ナキモ)古事記ハ純然タル漢語ニ讀ミ下スベキ為メ作レル者ニアラザリシ<sup>レ</sup>明カナリ余輩ノ説ニ據シハ原書ハ後世日本ニ行ハレタル一種ノ讀法ニ從ヒ(純然タル支那ノ書籍ヲ讀ムニモ亦此法ヲ用フ)半ハ漢語ニ讀ミ下シ半ハ日本語ニ讀ミ下スベキ為メ作りタル者ノ如シ然ルニ近世日本學士ノ一派ハ外國ノ事物ヲ厭惡スル<sup>レ</sup>其度ニ過ギテ古事記ハ始メヨリ專テ日本語ニ讀ミ下ス

ベキ爲ニ作ル者ナリト主張シ殊ニ本居氏ハ  
上古日本語ヲ他ノ書中ヨリ詮鑿シテ古事記ノ  
全文ニ盡ク日本訓ヲ附シ只應神天皇ノ御世ニ  
日本ニ舶載セシニ部ノ支那書(論語及ヒ千字文)  
ノ題号ト朝鮮王一名朝鮮人支那人三四名ノ称  
呼ノ外ハ一ノ支那音ニ者ナカラシメンヲ務  
メタリ今此日本學士ノ説ノ是非ハ姑ク之ヲ論  
ゼザルモ歐洲ノ學士ハ日本語ノ神聖ナルヲ信  
ゼザレバ必スヤアストン氏ノ説(其説載セテ氏  
ガ日本文典ニ在リ)ニ左祖シ本居氏ノ此訓法ハ

第八世紀ノ頃日本ノ史學士ガ古事記ノ本文ヲ  
讀下セシ所ノ訓法ト異ナルベキヲ思惟セン  
疑ナシ

○第二 譯例ノ詳説 此章ハ緊要ナラザルヲ以テ省キテ譯セズ

○第三 日本紀ノ事

古事記ハ古代史記中ニ在テ獨歩ノ者ニアラザ  
ルト是レ一般ニ人ノ知ル所ニシテ且前章ニ述  
ブル所ヲ推シテモ亦能ク之ヲ知り得ベシ先代  
舊史記ハ其眞偽ノ疑ヲベキ者アルヲ以テ姑ク  
之ヲ擧ゲザルモ古事記ノ外ニ尚日本ノ古學者

ノ真正ノ書トシテ必讀スル所ノ書アリ日本紀  
ト稱スル者即チ是ナリ此書ハ其價值ニ於テハ  
古事記ニ一等ヲ下タルト雖氏人ノ稱讚ニ於テ  
ハ常ニ其右ニ出デタリ其成功ハ古事記ヲ元明  
天皇ニ奏上セシ後八年即チ紀元七百二十年ニ  
在リ

古事記、日本紀ハ其趣旨共ニ相同シ然レ氏古事  
記ノ言語及ビ文體ハ朴質ニシテ潤色ナク日本  
紀ハ全ク之ニ反セリ日本紀ノ文體ハ多クハ(歌  
ノ如キハ其儘ニ之ヲ存スルモアリ或ハ全ク之

ヲ刪ルモアリ)漢文ノ体裁ニ據リ練熟シタル漢  
語ヲ用フルノミナラズ尚且其趣旨ヲ修理整頓  
シテ之ニ潤色ヲ加ヘ務メテ其書ノ体裁ヲ漢史  
ニ類似セシメタル所アリ又日本紀ハ古代ヨリ  
傳ハリタル未熟ナル日本ノ傳説ニ混合スルニ  
支那理學ノ臆説ト道德ノ訓誨トヲ以テセリ例  
ヘハ萬物ノ起原ヲ陰陽(支那理學ノ二元質)ノ二  
元ニ歸シタルニ三ノ詞句ヲ以テ「ナチュラリスム  
様ノ日本ノ天地創造説ヲ誘引シ、易經、禮記等ノ  
支那經書ヨリ引用シタル語ヲ以テ、小説様ノ神



武天皇ノ告諭ヲ潤色スルガ如キ是ナリ又日本  
傳説中ノ兒戲ニ類スル者ヲ刪リテ記セザル所  
ニニアリ例ヘハ稻羽ノ素菟ノ説多通且久(蝦蟆)  
ノ諸神ノ議ニ參セシ説解語ノ鼠ガ大物主神ヲ  
欸待セシ説本書第二十三段ニ參考スベシ又ノ如キ  
是ナリ又傳説ノ旨趣ノ元來奇怪ナル者ヲ閑雅  
ニシ或ハ之ヲ解説シタル所ニニアリ其最モ著  
名ナル一例ハ伊弉那岐ノ命ガ其故妻ヲ見ント  
欲シテ黃泉ヨモツクニニ到ルノ説殊ニ其泉津平坂ヲ登ル  
ノ説是ナリ蓋シ古事記ニ載セタル傳説ニ據レ

ハ此平坂ヲ以テ明カニ實際ノ地名ナリト解シ  
タリト雖氏日本紀ノ撰者ハ務メテ其祖先ノ働  
作ヲシテ學識アル支那人ノ働作ニ似セシメント  
欲シテ之ガ註解ヲ下ダシ或所謂泉津平坂者不  
復別有處所但臨死氣絶之際是之ヲ謂フ歟ト記セリ  
然レ氏伊弉那岐命ノ顯國ニ還歸セラル、時亦  
此平坂ノ事ヲ本文中ニ記載シタルヲ以テ見レ  
ハ此臆説ノ非ナルヲ知ルベキノミ之ヲ要スル  
ニ余輩ヲシテ日本紀ヲ評セシメハ猶七十士譯  
ノ舊約全書ヲ評スルガ如ク理ニ合ハザル者ヲ

強テ理ニ合ハシメタリト謂ハザルヲ得ス  
日本紀ノ漢語ヲ以テ傳説ヲ記録シ且之ヲ鍛鍊  
潤色スルト此ノ如シ然ルニ其世人ノ愛顧ヲ受  
ケシト古事記ヨリ多カリシハ何ノ故ゾト問フ  
者或ハ之ヲラシ

此答ハ一目ノ下ニ明カナリ抑日本紀ノ書タル  
頗ル支那ノ思想ニ模擬シタル所アルヲ以テ支  
那様ノ模範ニ陶造セラレタル人物ノ心ヲ満足  
セシムルト甚ダ多ク兼テ又讀者ヲシテ上古ノ  
天皇ヲ崇尊スルノ心ヲ發起セシメ國ノ神祇ヲ

信仰スルノ念ヲ發起セシムルノ傾向アリ且人  
間社會ノ初世ニ於テハ事物ノ理ヲ推究スル者  
甚ダ希ナルヲ以テ本書ニ載スル所ノ矛盾ノ説  
ヲ視レバ之ニ拘泥セズシテ却テ之ヲ解釋セン  
ト務メシ者ノ如シ例ヘバ天地ノ剖判ノ如キハ  
其事ノ起レル年既ニ久シキヲ以テ先ツ此事ノ  
源因ヲ以テ陰陽ニ氣ノ交接ニ歸スル理學説ヲ  
信ジ之ニ次テ亦伊弉那岐命伊弉那美命ヲ以テ  
日本ヲ生出シタル男女ノ神ナリトスルノ説ヲ  
信スルモ前後ノ二説矛盾セリト謂フベカラズ

何トナレバ萬物創造ノ二元質ハ一種特別ノ様式ニ因リテ此ニ神ノ身ニ表様セラル、ノ理ナシトセス且實際ニ於テモ日本ノ諸書ニハ陰神陽神ノ稱號ヲ此ニ神ニ附シタル者アリハナリ又古事記ノ第四段ニ載セタル説話ニ就テ伊邪那美神ノ爲ス所ヲ精細ニ詮鑿スレバ陰陽ノ語ヲニ神ニ用フベカラザルガ如シト雖氏古事記ノ撰者モ亦既ニ其序文ニ於テ陰陽ノ語ヲニ神ニ用フルヲ認許セリ又日本紀ニ據レハ上古ノ天皇神功皇后ノ其兵士ニ告諭スルヤ書經ヨ

リ引用シタル詞句ヲ借り又景行天皇ノ蝦夷人ハ事ヲ説クヤ支那ノ風土記ニ載セテ至當ナル言語ヲ用ヒタリ然ルニ其實此ニ帝ハ未ダ亞細亞大陸ト交際ヲ開カザリシ以前ニ日本國ヲ統御シ給ヒシ者トスレバ年代ノ錯誤ヲ踐ム者ト謂フベシ然レモ亦日本紀ニ於テハ此ニ帝ノ言行ヲ記録スルニ純全タル支那語ヲ以テシ其聲調ノ自然ノ節奏ニ合ヘルヲ以テ讀者ハ半ハ此年代ノ錯誤ヲ發見スルヲ能ハザリシナリ又支那ノ風俗一旦日本ニ傳ハリテヨリ日本ノ風俗

支那ノ風俗ニ壓倒セラレ神官ノ外ニハ其日本ノ風俗タルヲ知ル者ナキニ至リシ例往々之アリ龜甲ヲ用ナル占法ノ如キハ則チ其一例ニシテ此支那ハ占法一旦日本ニ行ハレテヨリ鹿ノ肩骨ヲ用ナル古代日本ノ占法ハ全ク廢棄ニ屬セリ蓋シ鹿ノ肩骨ヲ用ナル此日本ノ占法ハ是モ亦上古亞細亞ノ大陸ヨリ日本ニ傳ハリシ者ナリヤ否ヤ之ヲ斷言スルヲ能ハザレト典籍ノ記載スル所ニ據レハ此占法ハ上古日本人カ神祇ノ意思ヲ占ヒシ最舊ノ方法ナリシト明ケ

シ六十ノ花甲子ヲ用ヒテ年月日ヲ數フル風俗ノ如キモ亦其一例ニシテ此風俗一旦日本ニ傳ハリテヨリ日本人ノ慣習全ク之ト結合シ大陸文明ノ未ダ日本ニ傳ハラザリシ以前ノ事蹟ヲ記スルニモ此花甲子ヲ用ヒ毫モ其年代ノ錯誤アルヲ發見セザリキ又日本紀ニ於テハ星學器械司天臺著作術ノ未ダ日本ニ傳ハラザリシ一千年以前ニ生出シタル事蹟ヲ記スルニ一々其月日ヲ配當スルノ笑フベキ(今代ノ歐洲人ニハ)愚考ヲ立テリ是レ亦矛盾タルト一見シテ明

白ナレト批評力ニ乏シキ東洋人ハ之ヲ發見ス  
ル丁能ハザリキ日本其細説ハ計時法ヲ採用  
氏ノ日本年表ニ載セテ詳カナリ此學士ハ日本  
古代史ニ支干ヲ用ヒタルヲ非難シテ文學上  
ノ虚偽ノ最モ甚シキ者ト爲シ此説ヲ推シテ日  
本古代ノ歴史モ亦毫モ信用スルニ足ラズト爲  
セリ又本居氏ノ真曆考及凡テ半開化ノ人民ハ  
事物ニ就テ疑問ヲ發スルノ心ナク殊ニ其學者  
ハ古代ノ事蹟ヲ貴重スル丁最モ深キが故ニ其  
事蹟ニ就テ疑問ヲ發スル丁モ亦最モ遲シ夫ノ  
孔夫子が自ら其身ヲ評シテ述而不作信而好古  
ト謂ハレタル其言ハ實ニ東洋學者ノ心術ヲ適

切ニ形容シタル者ト謂フベキナリ又言語ノ上  
ニ就テ古事記日本紀ノ二書ヲ比較スレハ其難  
易頗ル著明ナリ外國ノ言語文明ノ普ク日本ニ  
行ハレシ後一二百年ノ間ハ日本ノ學校ニ於テ  
專ラ支那ノ典籍ヲ教授シ且此際日本ノ言語モ  
亦俄然トシテ變遷シタルヲ以テ支那經書ノ語  
ヲ解スル丁ハ易ク日本上古ノ語ヲ解スル丁ハ  
難クナレリ此ニ語ノ情態ハ余輩羅甸語ノ書ト  
古英語ノ書トヲ將テ之ヲ比較セハ畧之ヲ想像  
スルニ足ルベシ其後第十八世紀中日本維新ノ

大義ノ人心ニ感添スルヤ日本ノ學者ハ古事記ヲ以テ日本紀ヨリ更ニ真正ニシテ且國體ニ合フタル書ト爲シ稍之ヲ貴重スルノ風ニ趣キタリ然レモ古事記ノ文體タル賤劣ニシテ閑雅ナラズ且許多ノ註釋ヲ參考スルニアラザレハ了解ニ難キ所アルヲ以テ必スヤ日本紀ノ如ク世人ノ愛顧ヲ受ケルヲ能ハザルベシ是レ此ニ書ノ殆ド同時ニ公ケニセラレタルニ拘ラズ各其傾向スル所ヲ異ニシ隨テ亦其成績ヲ異ニセシ所以ナリ

然レモ亦歐羅巴ノ學士ノ爲ニハ日本紀ノ價值尠ナシトモ所謂ル神代ノ事ヲ記スルニ當リ本文ノ註解トシテ「一書曰」ト云ヘル一項ヲ加ヘ同ニ傳説中ノ大同小異ナル者數種ヲ記載シタルハ是レ其價值ノ最モ貴キ所トス實ニ「日本紀中」ノ一書ニ曰ク「ト云ヘル句ハ近世日本ノ論文中ニ於テ往々遭遇スル所ニシテ此書ノ脚註ニモ亦時々之ヲ記載シタルハ讀者此句ニ遭遇スルトアラテン又古事記ニ載セザリシ傳説ニシテ日本紀ノ本文或ハ其「一書曰」ノ註解ニ載セタル

例 往之之例

ハ日月相代ナリテ照ラス所以

理ノ説明セシガ為ニ作りタル奇説

此傳説ヲ細引用ス

ル<sup>カ</sup>蓋<sup>シ</sup>利<sup>ア</sup>ラシ<sup>ク</sup>則<sup>チ</sup>左<sup>ノ</sup>如<sup>シ</sup>「<sup>一</sup>書<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>、天照大  
 神在<sup>テ</sup>於<sup>テ</sup>天<sup>上</sup>曰<sup>ク</sup>、聞<sup>ク</sup>葦原中<sup>ノ</sup>國有<sup>ニ</sup>保食神<sup>ト</sup>、<sup>一</sup>空<sup>ニ</sup>爾<sup>ヲ</sup>、月夜見、  
 尊就<sup>テ</sup>候<sup>ス</sup>之<sup>ノ</sup>月夜見、尊受<sup>テ</sup>勅<sup>ヲ</sup>而降<sup>リ</sup>己<sup>ニ</sup>到<sup>ル</sup>干保食神<sup>ト</sup>、許<sup>ニ</sup>保  
 食神<sup>ト</sup>乃<sup>チ</sup>廻<sup>リ</sup>首<sup>ヲ</sup>嚮<sup>テ</sup>國<sup>ニ</sup>則<sup>チ</sup>自<sup>リ</sup>口<sup>ニ</sup>出<sup>ス</sup>飯<sup>ヲ</sup>又<sup>チ</sup>嚮<sup>テ</sup>海<sup>ニ</sup>則<sup>チ</sup>鱈<sup>ノ</sup>麩<sup>ヲ</sup>狹<sup>ク</sup>  
 亦<sup>チ</sup>自<sup>リ</sup>口<sup>ニ</sup>出<sup>ツ</sup>又<sup>チ</sup>嚮<sup>テ</sup>山<sup>ニ</sup>則<sup>チ</sup>毛<sup>ノ</sup>麩<sup>ヲ</sup>柔<sup>ク</sup>又<sup>チ</sup>自<sup>リ</sup>口<sup>ニ</sup>出<sup>ツ</sup>夫<sup>ノ</sup>品<sup>ノ</sup>物<sup>ヲ</sup>悉<sup>ク</sup>  
 備<sup>ヘ</sup>貯<sup>テ</sup>之<sup>ヲ</sup>百<sup>ノ</sup>机<sup>ニ</sup>而饗<sup>ス</sup>之<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>時<sup>ニ</sup>月夜見、尊念<sup>テ</sup>然<sup>ラ</sup>作<sup>テ</sup>色<sup>ヲ</sup>曰<sup>ク</sup>、穢<sup>キ</sup>  
 矣<sup>キ</sup>鄙<sup>キ</sup>矣<sup>キ</sup>、寧<sup>ロ</sup>可<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>口<sup>ニ</sup>吐<sup>ク</sup>之<sup>ヲ</sup>物<sup>ト</sup>敢<sup>テ</sup>養<sup>フ</sup>我<sup>ヲ</sup>乎<sup>ト</sup>、迺<sup>チ</sup>拔<sup>テ</sup>劍<sup>ヲ</sup>擊<sup>テ</sup>殺<sup>シ</sup>然<sup>ラ</sup>  
 後復<sup>シ</sup>命<sup>ジ</sup>具<sup>言</sup>其<sup>事</sup>時<sup>ニ</sup>天照大神怒<sup>リ</sup>甚<sup>ク</sup>之<sup>ヲ</sup>曰<sup>ク</sup>、汝<sup>ハ</sup>是<sup>レ</sup>惡<sup>シ</sup>神<sup>ト</sup>  
 不<sup>レ</sup>須<sup>ク</sup>相<sup>見</sup>乃<sup>チ</sup>與<sup>テ</sup>月夜見、尊一日<sup>ニ</sup>一夜隔<sup>テ</sup>離<sup>テ</sup>而住<sup>リ</sup>ト、古  
 事記中<sup>ニ</sup>モ稍<sup>シ</sup>之<sup>ニ</sup>類<sup>セ</sup>ル傳説<sup>アリ</sup>、空<sup>ク</sup>此<sup>ノ</sup>書<sup>ノ</sup>  
 第十<sup>七</sup>段<sup>ノ</sup>又<sup>チ</sup>須<sup>ク</sup>佐<sup>サ</sup>之<sup>ノ</sup>男<sup>ト</sup>命<sup>ト</sup>放<sup>テ</sup>逐<sup>ク</sup>ノ説<sup>ヲ</sup>擴張<sup>シ</sup>テ  
 參<sup>テ</sup>看<sup>ス</sup>スベ<sup>シ</sup>又<sup>チ</sup>須<sup>ク</sup>佐<sup>サ</sup>之<sup>ノ</sup>男<sup>ト</sup>命<sup>ト</sup>放<sup>テ</sup>逐<sup>ク</sup>ノ説<sup>ヲ</sup>擴張<sup>シ</sup>テ  
 此<sup>ノ</sup>命<sup>ノ</sup>諸<sup>ノ</sup>神<sup>ノ</sup>許<sup>ニ</sup>至<sup>リ</sup>同<sup>ノ</sup>宿<sup>ヲ</sup>乞<sup>ヒ</sup>シ時<sup>ニ</sup>諸<sup>ノ</sup>神<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>  
 ヲ許<sup>サ</sup>サ<sup>リ</sup>シ<sup>ヲ</sup>述<sup>ベ</sup>タル奇説<sup>ノ</sup>如<sup>キ</sup>則<sup>チ</sup>是<sup>レ</sup>  
 ナリ又<sup>チ</sup>日本紀<sup>ニ</sup>ハ古事記<sup>ニ</sup>載<sup>セ</sup>ザル歌<sup>ノ</sup>載<sup>セ</sup>

テ、上古日本語ノ辭書ニ増補スル所甚ダ多シ、又  
 日本紀ニハ本文ノ註解トル種々ノ訓讀法ヲ  
 載セタルハ之ヲ參考シテ以テ古事記中眞字ニ  
 テ寫シタル言語ノ發音又ハ假字ニテ寫シタル  
 言語ノ意義ヲ推知スルヲ得ベシ、又古事記ハ  
 六百二十八年ヲ以テ終ハレ、日本紀ハ七百年  
 ヲ以テ終ハリ、古事記ノ範圍内ニ含蓄セザル七  
 十二年間ノ事蹟ヲ記セリ、是ニ由テ之ヲ觀レハ  
 或者ノ如ク、日本紀ヲ以テ日本史記中ノ巨擘ト  
 為スノ説ヲ主張スルハ、則チ非ナリト雖、然レ

鈎

氏亦日本ノ神傳言語ヲ考究スル者ハ決シテ日本紀ノ補助ヲ籍ラザルヲ得ザルヲ明カナリ

○第四 古代日本人ノ風俗及ヒ慣習

古事記ノ傳説ニ據リテ之ヲ考フレハ神代ノ日本人ハ既ニ野蠻ノ状態ヲ脱却シテ稍熟練ヲ得タル者ノ如シ此人民ハ石世ヲ經過シタルニ未ダ眞正ノ青銅世ニ入ラザリシ者ノ如シ而シテ其青銅ヲ知リタルハ後世大陸ノ鄰國ト接近セシ時ニ始マリシ者ナリ此人民ハ鐵ヲ以テ矛劍及ヒ種々ノ小刀ヲ製作シ平穩ナル目的ノ為

ニハ鈎ヲ製シテ魚ヲ釣リ又ハ鈎ヲ製シテ其屋

ノ門戸ヲ鎖シ戰爭獸獵ノ目的ノ為ニハ弓矢矛

鞆トモノ外ニ係蹄フナ押機オシヲ用ヒテ禽獸ヲ捕獲シ外冠エヒカウラド

ヲ殺戮セリ而シテ其鞆ハ通例獸皮ヲ以テ製シ

又矢ニ羽ヲ附ケタリト記載セリ棍棒モ亦此項

目中ニ加ヘザルベカラズ又古事記中ニハ常ニ

弓矢刀劍ヲ記載シタルニ其弓矢刀劍ノ製造ス

ルノ器具ヲ載セス又杵臼ヒキ火鑽ヒキ氷目ヒキ矢ヤ鐔ク鎌及ヒ

衣ヲ織ルニ用フル梭ヒノ如キハ余輩ノ常ニ聞ク

所ナレ氏今日普ク行ハレタル鋸斧ノ如キ家器



ハ之ヲ記載スルヲアルヲ聞カス  
航海ノ術ハ、尚未ダ開ケザリシ者ノ如シ、屢、舟ヲ  
漕グ、舟ヲ淺瀬ニ遣ル、ハ、既ニ上古ノ歌ニ之  
ヲ記載シタリ、然レモ帆ヲ楫ケテ航海スル、ハ、  
支那ノ開化ノ日本ニ普及セシ第十世紀ノ央ニ  
至リテモ、尚之ヲ十分ニ知ラザリシ、是レ中世  
ノ日本書ニ徴シテ知ル所ナリ、又古事記及ヒ日  
本紀ニハ、<sup>フタタケ</sup>二俣小舟ヲ内地ノ池若シクハ湖ニ用  
ヒタルヲ記載シタリト雖モ、此ニ書ノ前部ヲ  
閱スルニ、人ノ海上ニ往キ或ハ天上ヨリ降ルヤ

橈ヲ藉ラズ又自己ノカヲ勞ヒズ、只籃ノ中ニ入  
レハ、神明ノ冥護ヲ得テ、其到ラント欲スル所ニ  
到ルヲ得ル者ノ如シ、  
日本文明史ノ斷章ハ、カヂト云ヘル語ノ中ニ  
存セリ、上古ノ日本語ニ於テ「カヂ」ト云ヘハ、<sup>カヂ</sup>橈ノ  
ノヲナレモ、今ノ日本語ニ於テハ、支那ノ櫓ノ  
字ヲ以テ橈ニ當テ、只舵ノミヲ「カヂ」ト云ヘリ、  
或ハ古代日本ノ舟ハ、<sup>ミモ舵ノ如キ者ヲ備ヘ上古ノ日本語ニ「カヂ」ト云ヘリ</sup>タイシト云ヘルハ、則チ  
舵ヲ指シタル者ナリトノ説アレモ、上古ハ、渡  
シテ舵ノ如キ者ヲ備ヘズ、後世ニ至リテ舵ト

橈トノ區別ヲ生ジタル者ニシテ、古代日本ノ  
舟人ハ舵ヲ用ヒザルヲ得ザル時ハ、橈ヲ以テ  
之ニ代ヘタリトノ説信ナルニ近シ。

余輩ノ所謂ル市邑村落ニ就テハ、古事記及セ日  
本紀ノ神代ノ部ニ之ヲ記載シタルヲ見ヌ、然レ  
氏他ノ書ヲ閱シテ之ヲ考フルニ、當時海濱或ハ  
大河ニ沿ヒテ小村落ヲ設ケ、家屋ハ離散シ、人口  
ハ稀疏ナリシ者ノ如シ、又家屋殊ニ王宮神殿ノ  
建築ノ事ニ至リテハ、書中ニ屢之ヲ記載シタリ。  
(日本語ニテハ、王宮神殿ニ當ツルニ、只一語(ミヤ)

ヲ以テセリ)而シテ古事記ノ撰者ハ、此神聖ナル  
宮殿ノ建築ヲ記スルニ當リ、其慣用ノ平淡同調  
ナル文体ヲ棄テ、詩歌ノ想像体ニ飛ブアリ。  
出雲ノ國主大物主神ガ日神ノ子孫ノ為ニ其位  
ヲ遜ル時、我宮ハ於底津石根宮柱布斗斯理於高  
天原氷木多迦斯理テ之ヲ建ツベシト契約セシ  
ガ如キ、則チ是ナリ、本書第三十二段然レ氏讀  
者ハ此語アルヲ以テ、其王宮神殿ノ規模ハ頗ル  
華奢壯麗ナル者ナリト思フハ非ナリ、「サトウ」氏  
曾テ祝詞後祝詞ニ編輯セシ者ニシテ、古事記ヲ編輯セシ其説ハ

古事記ノ説トモ中ヨリ抜粹シテ此家屋建築  
ノ事ヲ詳記シタレハ今爰ニ氏ノ語ヲ引用スル  
ヲ以テ便利ナリトス曰ク

日本天皇ノ宮殿ハ木造ニシテ今ノ家屋ノ如  
ク平扁ナル石ノ上ニ其柱ヲ建テスシテ直チ  
ニ之ヲ地中ニ建テリ家屋ノ仕組ハ柱梁木垂  
木戸柱窓架ヨリ成リ葛又ハ藤ノ莖ヲ拗リテ  
繩ヲ製シ之ヲ以テ其仕組ヲ結着セリ又其地  
床ハ頗ル低キヲ以テ住者ノ疊ノ上ニ蹲踞シ  
又ハ平卧スル時有害ナル蛇蝎ノ害ヲ受ケル

ト往々之アリ蓋シ上古ハ今日ノ如ク  
ダ開ケザリシヲ以テ此蟲害ノ多カリシヲ  
知ルベシ又所謂ル地床ナル者ハ元來屋内ノ  
両側ニ繞ラシタル卧床ノ如クニシテ其餘ノ  
空地ハ只泥床ノミナリシガ其後漸ク卧床ヲ  
増大ニシ終ニ屋内ノ全面ヲ占ムルニ至リシ  
者ノ如シ又垂木ハ之ヲ交斜シテ棟木ノ上ニ  
突出セシムルト今日神殿ノ屋根ニ於テ見ル  
ガ如シ但シ神殿ノ建築ニ二様アリ一ハ古代  
ノ傳説ニ從ヒ垂木ヲ盡ク交斜シテ屋根ノ上

ニ突出セシムル者ト一ハ更ニ高上ナル建築  
法ニ從ヒ只屋根ノ西端ニ於テノミ垂木ヲ交  
斜セシメテ以テ家屋ノ粧飾ト為ス者是ナリ  
又屋根ハ茅藁ヲ以テ全ク之ヲ葺キ各端ニ破  
風アリ之ニ穴ヲ穿チ薪炭ノ烟ヲシテ洩出セ  
シム故ニ燕雀其穴ヨリ屋内ニ飛入りテ梁木  
ニ止マリ食物又ハ食物ヲ煮ル所ノ火ヲ汚洩  
スルトアリ本會事務録第九冊第二部百  
九十一ニ葉ヲ參考スベシ  
ナトウ氏ノ此記文ハ家屋建築ノ事ヲ言ヒ盡ク  
シタレハ左ニ只數言ヲ加フルヲ以テ足レリト

ス當時家屋ノ周圍ニハ墻垣ヲ設ケ其門戸ハ鉤  
ヲ以テ之ヲ鎖シ而シテ其狀ハ今日日本ニ於テ  
見ルガ如キ滑過スベキ「スクリ」様ノ門戸ニ  
似スシテ今日歐羅巴ニ於テ見ルガ如キ門戸ニ  
似タリ又窓牖ハ唯ニ穴ヲ穿チタル者ニ過ギザ  
ルガ如シ又當時坐卧ノ用ニ供スルガ為メカハ皮疊クミ  
管疊スガタミヲ用フルノミナラズ播紳富豪ノ徒ニ至リ  
テハ絶疊キヌタミヲモ用ヒタルトヲ記載シタル所一二  
處アリ  
身ヲ清潔ニスルノ慣習ハ今日日本人ノ亞細亞

大陸ノ人民ニ對シテ誇ル所ナリ、而シテ人ノ河  
水ニ浴シタルヲ或ハ某天皇ノ御子ニ湯母オホユ  
坐エ若湯坐ワカユヲ附ケタルヲハ屢古書中ニ記載スル  
所ナレバ此清潔ノ慣習ハ未ダ今日ノ如クニ發  
達セシニハアラザレト夙ニ上古ニ在リテ其萌  
芽ヲ發セシ者ノ如シ又襖袂ハ日本人ノ遵守セ  
ル宗教儀式ノ一部分ナリ又古書中ニ屢、廁ノ事  
ヲ記載セリ此廁ハ通例住居ヲ離レテ水邊ニ建  
テタル者ノ如シ上古ノ日本語ニ廁ヲ稱シテカ  
ハヤ川屋ト云ヘルハ蓋シ此緣故ニ基キシ者ナ

ルヲ疑ヒナシ抑、大和物語ハ人ノ能ク知リタル  
第十世紀ノ日本書ナリ其書ニ載セタルむ昔  
人何有り主い田くの川の面はら幕よはり張をちて  
居み子け村ト云へル一節ハ水邊ニ家ヲ建テタル  
トテ證スベキ一説話ナリ又古事記及ヒ日本紀  
ニ載セタル神武天皇ノ傳説又古事記ニ載セタ  
ル垂仁天皇ノ傳記本書第四十四段ノ註解第十  
ニ十九ノ參ノ如キモ水邊ニ家ヲ建テタルヲ  
證スル者ト為シテ之ヲ解説スルヲ得ベシ然  
レト古事記及ヒ日本紀ノ傳説ハ文意頗ル曖昧

ナル所アルヲ以テ其證ト為スニ足ラズ余輩ハ  
只大和物語ノ断章ニ據リテ以テ實際ニ家ヲ水  
邊ニ建テタルヲアリシヲ證明シ併セテ又古今  
萬國ニ於テ野蠻ノ人民ガ水邊ニ家ヲ建テタル  
例ニ倣ヒテ日本人モ亦家ヲ水邊ニ建テシトモ  
アルベシト想像スルノミ古事記及び日本紀ヲ  
讀ムゴトニ殊ニ我目ニ觸ル、所ノ一種ノ家屋  
ハ所謂ル<sup>ウ</sup>産<sup>ア</sup>屋<sup>ヤ</sup>是ナリ此家屋ハ婦人ヲシテ退居  
セシメ人ノ目ニ觸レザル様分婉セシムルガ為  
ニ設クル所ニシテ只一房室ヨリ成リテ窓牖ノ

設ケナシ

「エル子ストサトウ」氏ハ千八百七十八年八丈  
島ヲ巡回シ此日本帝國ノ僻遠ノ地ニ於テ本  
文ニ記載シタル風俗ノ近世ニ至ル迄行ハレ  
タルヲ詳説スルト左ノ如シ曰ク  
往昔八丈島ニ於テハ婦人ノ妊娠中ニ在ル者  
ハ之ヲ山上ノ茅屋ニ逐ヒ日本記者ノ説ニ據  
レバ他ヨリ之ヲ看護セズシテ自身ノ看護ニ  
放任シタルヲ以テ出産ノ赤子ハ往々死ヲ致  
セリ或ハ又此粗暴ナル境地ニ處シテ其生ヲ

保ツコトヲ得タルモ、其子ハ生涯身ニ固着シテ  
癒エザル疾病ノ種子ヲ播セリ、又此婦人ハ嚴  
刻ニ絶交ノ規則ヲ課セラレ、其父母死去ノ時  
ト雖、氏茅屋ヲ出デ、之ヲ訪問スルコトヲ得ザ  
リキ、此婦人ハ斯ク一室ニ拘留セラレ、ヲ以  
テ其身ニ有害ナル成績ヲ及ボスノミナラス、  
尚且永ク家ヲ出テ、其兒女及ビ其家事ヲ監  
督スルノ義務ヲ負キシヲ以テ、一家ニ取リテ  
モ其不便亦少ナカラズ、然レモ今日ニ至リテ  
ハ、此風俗ノ嚴刻ナル所大ニ軟弱ニナリ、此茅

屋ヲ山上ニ建築セズシテ、唯之ヲ我家ノ傍側  
ニ建築スルノ風ト成レリ、近世日本ノ内地  
ヨリ來レル人、此陋習ノ依然トシテ、今日ニ行ハ  
ル、ヲ視テ、大ニ之ヲ慨歎シ、屢、此陋習ヲ廢棄  
スルノ議ヲ建白セシガ、將軍ノ治世中ハ、改良  
ノ氣象ニ乏シキヲ以テ、其功ヲ奏スルコトナク、  
天皇ノ御世ニ至リテ、始メテ其功ヲ奏シ、島人  
ニ説諭シテ、上ニ記シタル風俗ト此陋習トヲ  
并セテ廢棄セシムルコトヲ得タリ、今日ニ至リ  
テハ、官府モ此風俗ヲ認許セズ、輿論ノ勢力モ

亦大ニ之ヲ非議スルガ故ニ此古代儀式ノ遺物ハ久シカラズテ此群島ヨリ消失セントスルノ勢ニ傾向セリ本會事務録第六冊第三部四百五十五六葉ヲ參考ス

男女新ニ婚姻ヲ結ブ時ハ殊ニ之ガ為ニ新屋ヲ建築シ之ニ移リテ婚禮ヲ完ウセシ者ノ如シ又天皇即位ノ時ハ必ズ之ガ為ニ宮殿ヲ新築セシ者ノ如シ

通例ノ年表ニ從ヘバ紀元前百年ニ相當スル時代然レ氏余輩ノ説ニ據レバ此時代ハ尚荒唐ノ

時代タルヲ免レ難シニ於テ始メテ書中ニ城堡ノ事ヲ記載シ稲城ト云ヘル奇語ニ遭遇セリ抑此語ノ本義ニ至リテハ日本註釋家ノ諸說紛々トシテ一定ニ歸セス然レ氏日本古代ノ事ヲ記シタル漢文ノ書ニ據レバ戰士ノ身ヲ遮蔽スベキ墻垣ノ一種ニシテ堡障ノ用ヲ為ス者ヲ稱シテ稲城ト云フガ如シ本書第七十段ノ註稲城ト云ヘル義ナリ若シ此説ヲシテ眞ナラシメバ稲城ト云ヘル語ハ往昔只墻垣ニ過ギザル物ノ名稱ナリシニ後ニハ石城ノ意義ヲ有スルニ至リタリ



是レ亦文明ノ上進スルニ從ヒテ言語ノ上進シタル例ト謂フベシ

今住居ノ趣旨ノ終尾ニ臨ミテ書中ニ往々穴居

人ノ記載アルヲ謂ハザルベカラズ蓋シ日神

ガ岩窟ニ退隱セラレシ傳説ヲ聞カバ或ハ日本

人ノ祖先ハ常ニ岩窟ニ居住セシ者ナルヲ想

起スベシ本書第十六段ヲ参考スベシ第四十八段及心第八十段ニモ亦穴居人ノ事ヲ

記載然レ氏決シテ此事アラザリシヲ信ス且假

ニ此事アリタリトスルモ日本ノ傳説ノ今ノ体

裁ニ整頓シタル時代ニハ此穴居ノ風俗業ニ已

ニ廢棄セラレ當時岩窟ニ居住セシ者ハ只野蠻

ナル「アイノ」人ト粗暴ナル賊徒トニ過ギザリシ

ナルベシ又日本ニハ天然ノ洞穴甚ダ少ナクシ

テ人造ノ洞穴多キニ居ルヲハ古書ノ文意ヲ推

シテ以テ之ヲ知ルベシ

古代ノ日本人ハ魚獸ノ肉ヲ食物トシ其獸肉ハ

獵夫ガ弓矢ヲ以テ射殺シ或ハ係蹄ヲ以テ捕獲

セシ者ナリ而シテ肉食ハ正史年代譯者曰ク履仲天皇ヨリ

以下ヲ以テ正史年代トノ頃ニハ佛法ノ禁スル

所ナレ氏神代ノ頃ニハ未ダ此禁ナカリシナリ

又五穀ノ中ニ在テ、太古ヨリ耕作シタルニ疑ヒ  
ナキ者ハ、唯米ノミ、又大小豆、粟、麥及ヒ蠶ノ如キ  
ハ、神代ノ傳説参考第十七段ノ末ヲ中ニ一タビ之ヲ  
記載シタルニ、信スベカラズ、蓋シ此句ハ第八世  
紀ヲ距ルル遠カラザル時代ニ在リテ、猥リニ攪  
入シタル者ノ如シ、此他又蔬菜及ヒ果物ノ只一  
タビ書中ニ記載シタル者數種アリ、其名稱ハ下  
文ニ記スル所ノ植物表ニ就キテ参考スベシ、又  
酒ト稱スル飲料ハ、既ニ神代ノ頃ヨリシテ日本  
人ノ知ル所ナリ、第十六段ノ参考スベシ、註解第  
一、食事ニ用フ

ル箸ノ如キモ亦然リ、又古書ニハ屨、窪坏、坏蓋、盤  
(或ハ土器ヲ用ヒ、或ハ樹葉ヲ用フ)ノ事ヲ記載シ  
タルニ、温暖ヲ取ルガ為メ、火ヲ用フルヲアリシ  
ヲ聞カズ、又屨、机ノ事ヲ記載シタルニ、只饗物ヲ  
神前ニ供スルガ為メ、之ヲ用ヒテ、食事ノ時ニ之  
ヲ用フルヲアリシヲ聞カズ、且其机ノ形タル甚  
ダ小サク且低クシテ、歐羅巴人ノ思想ヲ以テ言  
ヘハ、卓子ニ似タルヨリハ、寧ロ盆ニ似タリ、  
古代ノ日本人ハ、衣服ノ用及ヒ種類ニ於テ頗ル  
高上ノ域ニ進メリ、衣裳、禪帶、被衣、冠等ハ、上古ノ

傳説ニ記載スル所ナリ、又當時ハ男女共ニ寶石ヲ貴重シ之ヲ以テ頸飾、腕飾及ヒ頭飾ヲ作り、今ノ日本人ノ服飾ニ寶石ヲ用ヒザル者ニ比スレハ實ニ霄壤ノ差アリ、又古代ノ日本人ハ麻布及ヒ楮皮ヲ以テ衣服ヲ製シ、アキチ苗根或ハ大青オホアヲ其他彩色アル草ヲ摩擦シテ衣服ヲ染メタリ、又古代ノ書ニ衣ヲ縫フヲ記載セス、且第四世紀ノ初、山海經ヲ註釋シタル者ノ言ニ據ルニ、日本人ハ針ヲ用ヒズトアレバ衣服ハ皆之ヲ組織シタル者ノ如シ、然レニ傳説ニ針第六十五段ヲ載ヒタリ、又當時主ニ獸獵ヲ

以テ營業ト為シタリシヲ見レバ、獸皮ヲモ又衣服ニ製シタルトアリシヲ想像ス、而シテ古事記ニ此想像ノ虚ナラザルヲ證スル所ノ一節アリ、本書第二十段初ノ参考スベシ、又日本紀ニ一タヒ、篋笠ノ事ヲ記載セリ、此篋笠ハ今尚日本ノ農夫ガ風雨ヲ避クルニ必不用アル所ノ具ナリ、又當時ニ於テハ、紐ヲ用フベキ所ニ藤葛ノ蔓ヲ用ヒタリ、又當時屢、櫛ノ事ニ就キテ記載アルヲ見レバ、頭髪ノ粧飾ハ、頗ル人ノ意ヲ用アル所ナルトヲ知ルベシ、當時男子ハ其髪ヲ二束ニ分チテ、頭部ノ左

右 = 結堆、童子ハ其髮ヲ結ビテ髻ト為シ、女子  
ノ未ダ嫁セザル者ハ其髮ヲ頂上ニ垂レ、其既ニ  
嫁シタル者ハ其髮ヲ結ビテ髻ト為シ、其餘髮ヲ  
頂上ニ垂レタリ、又古書ヲ通閱スルニ、耻辱ノ徵  
候トシテ断髮スルノ外ニ、頭髮又ハ鬚髯ヲ断チ  
シトアリシヲ見ズ、又男女ハ右ノ如ク理髮ノ様  
ヲ異ニスレバ、服飾ノ様ヲ異ニスルトアリシヲ  
見ズ、

頭飾、頸飾及ヒ腕飾トシテ用ヒタル寶石ハ其質  
何ナリシヤ、古書ヲ讀閱シテ、以テ之ヲ知ルトヲ

得ズ、蓋シ支那語ニ於テハ、種々ノ文字ヲ以テ寶  
石ノ種類ヲ示スト、雖モ日本語ニ於テハ、殊ニ人  
々ノ貴重スル所ノ圓形硬質ノ物ヲ示スニ、唯「タ  
マト云ヘル一語ヲ以テスルノミナレバ、其古書  
中ニ載スル所ノ「タマト云ヘル語ハ、各種ノ寶石  
ニ通用スル者ニシテ、毫モ其種類ノ區別ナシ、故  
ニ英語ニ之ヲ譯スルニ、*gemel* <sup>ジェメル</sup>ノ語ヲ用フ  
ルモ、亦 *brad* <sup>ブレード</sup>ノ語ヲ用フルモ、共ニ妥當ヲ欠カ  
ザル者ノ如シ、然レモ近年日本ニ於テ、古物考究  
者ノ得タル標本ニ據リテ之ヲ觀レバ、其寶石ノ

材料ハ、通例瑪瑙、水晶、玻璃、ビード蛇石及心スチーナイト滑石  
ニシテ、而シテ其形狀ハ圓筒形ノ勾曲シタル者、  
又ハ穿孔シタル者(勾玉、管玉)ナルヲ知ルベシ、  
古傳ニ記載シタル馴養ノ鳥獸ハ馬(但シ騎ルニ  
用ヒテ、牽クニ用ヒス)雞及心漁業ニ用フル鶉ノ  
三種アルノミ、又古傳ニ蠶ノ事ヲ記載シタルハ、  
後世ノ擾入ナルヲ既ニ上文ニ述ブルカ如シ、  
本書第百二十四段ニ載セタル傳説ニ據レバ、  
殆ド正史年代トモ云フベキ時代即チ第四世  
紀ニ於テ、始メテ朝鮮ヨリ蠶ノ輸入アリテ一

奇談トシテ之ヲ傳ヘタリ、然レハ第四十段及  
心第八十四段ニ、既ニ絶キヌダクニ疊ノ事ノ記載アリシ  
ヲ視レバ、其以前ニ大陸ヨリ日本ニ絹布ヲ輸  
入シタルヲ明カナリ、  
又古事記及心日本紀ノ後部ニハ、犬及心牛ノ記  
載アリ、然レハ羊、豚及心猫ハ、當時尙未ダ日本ニ  
入ラザリシ者ノ如シ、實ニ日本ニ於テハ、今ヲ距  
ル數年前迄ハ羊ヲ視ルヲ得ズ、又山羊ノ如キ  
モ殆ド之ヲ知ラズ、又豚及心雞ノ外ハ、家禽モ亦  
甚ダ稀ナリ、

今讀者ノ便利ヲ謀リテ、古事記ノ前部前代ト後  
 界ハ固ヨリ杜撰ノ誹ヲ免レ難ケレ氏神功皇后  
 ノ朝鮮ヲ征討セシ年代(即チ第三世紀ノ初メ)ヲ  
 以テ之ヲ分畫スベシ、是レ通常ノ說ニ據レハ日  
 本テハ此時代ニ於テ始メテ大陸ト交際ヲ開キ  
 其制度文物ヲ輸入シタリト謂フヲ以テナリ、然  
 レレ余輩ノ物說ニ據レハ日本ノ歴史ハ第五世紀  
 ト初メ履ノ脚ヲ得ルニ至ル迄、信ヲ置クベキ所  
 ナリト謂ハザルニ得ズ、其然ル所以ハ讀者本篇ノ末  
 章ヲ參考シニ載スル所ノ動植物ヲ枚擧スル下  
 テ知ルベシ、譯者曰ク、下ニ載スル所ノ動植物ノ名  
 左ノ如シ、ハ原書ニ英語及ヒ羅旬語ヲ以テ之ガ  
 對譯ナルヲ下ニ以テ之ヲ省ク、今無

胎生類

クマ熊

井猪

シカ鹿

ウサギ兔

ウマ馬(コマ駒)

子ハミ鼠

ミチ海驢

クヂラ鯨

羽禽類

カケ鶏

ウ鶉

カラス鳥

チドリ千鳥

サギ鷺

ソニドリ翠鳥

又エ鶉

キギシ雉

シギ鴨

シロトリ白鳥

カモ鴨

カリ鴈

爬蟲類

ワニ 鱷

カメ 龜

タニグク 假字

ヲロチ 蛇

ヘミ 蛇

昆蟲類

ムカデ 蜈蚣

アキツ 蜻蛉

ハハ 蠅

シラミ 虱

カヒコ 蠶

ハチ 蜂

魚類 其外

アカダヒ 赤鯛 (タヒ鯛)

スホキ 鱸

コ 海鼠

クラゲ 假字

貝類

ヒラアカヒ 假字

キサガヒ 蜆貝

シタグミ 細螺

植物類

カガミ 羅摩

ムク 假字

アハギ 假字

タケ 竹

ササ 小竹

ムギ 麥

マメ豆 (アツキ小豆)

カマ 蒲黃

ハギ 萩

ツバキ 椿

カツラ 其書體區ナリ

ヒノキ 檜

サカキ 榊

ヒカゲ 日影

ツツラ 黒葛

スギ 榲

カヤ 葦草

マサキ 眞賢木

ハジカミ 薑

コモ 海蓴

ヒ、ラギ 柎

アヰ 藍

ヤマユリ グサ山由理草

サキグサ 三枝草

アカ子 菑

アハ 粟

コケ 蘿

カシ 白檜 (カシハ 柏)

モ、桃

ソバ 假字

マツ 松

クス 葛

アシ 葦

イ子 稻

メ 海布

スゲ 菅

マサキノ カヅラ 眞柈鬘

ハジ 櫨

エヒカ ヲツラ 蒲萄

ハ、カ 朱櫻

カミラ 臭韭

アカカガチ 假字

ホ、ツキ 酸醬

「アカカガチ」ト同ジ

又古事記ノ後部ニ載スル所ノ動植物ハ則チ左

ノ如シ

動物類



ウシ牛	イヌ犬
タツ鶴	ハト鳩
ニホドリ磯鷓	ヒバリ雲雀
ハヤブサ隼	ウツラ鶉
スズメ雀	マナバシラ <small>假字</small>
ナザキ鷓鴣	イルカ入鹿魚
アユ羊魚	シロ鮪
カニ蟹	アム蛇
カキ蠣	
植物類	

ハリノキ椿	ミツナガシ <small>御綱柏</small>
ヌナハ蓴	アヲナ菘菜
アツサ梓	クリ栗
トコロツラ薺葛	マユミ木檀
ヒサゴ瓢	ヲギ菽
コモ菰	サナカツラ蓆
アジマサ檳榔	ハチス蓮
ホゾチ熟瓜	クヌギ歴木
ナラ楡	イチヒ赤檮
タチバナ橘	マキ檜

オホ子大根

サシブ 假字

ヒシ菱

又ヒル野蒜

ツキ槻

此他植物名稱ノ地名中ニ存スル者蓋シ二三アリ地名ノ科野ニシナアリ、蓼津ニタデアルガ如キ是ナリ、然レ是等ノ名稱ヲ英語又ハ羅匈語ニ對譯スルニ當リテ、穩當ノ譯字ヲ得ルヲ能ハザル者アリ、且日本ノ動植物名稱ハ他ノ事物ノ名稱ノ如ク、一語ニシテ二三種ヲ包括スルヲアリ、或ハ二三屬ヲ包括スルヲアルヲ記憶セザ

ルベカラス例ヘバ千鳥ト云ヘルハ「サンドパイ

ベル鳥「プローヴェル」名鳥或ハ「ドッテレ」名鳥ノ名稱ナ

リ、鴈ト云ヘルハ「グー」名鳥ニモ亦「バスタル」名鳥

ニモ通用セル名稱ナルガ如シ、又此等名稱中ニ

ハ今日ト千百年若シクハ千二百年前トノ間ニ

其施用ノ慣例ヲ異ニスル者アルヲ記憶セザ

ルベカラス是レ日本動植物ノ名稱ヲ對譯スル

ニ當リテ、精細ナル譯字ヲ得難キ所以ナリ、

禽學ニ係ル説ノ頗ル舊キ者ハ、本書第百二十

八段ニ載スル所ノ歌是ナリ、此歌ハ仁徳天皇

ト大臣建内宿稱タケノウチノスクトノ問答ニ係リテ、中央日本ニハ鴈ノ卵ヲ生マザルトヲ説ケリ、然レハ獨リ中央日本而已ナラズ、蝦夷島ノ南部ニ於テモ、尚雁ノ卵ヲ生ムトアルトヲ聞カズ、讀者前表ヲ一覽スレバ、古事記ハ植物書ニ非ニシテ、夥多ノ植物名稱ヲ載セタルトヲ知ルベシ、又茶樹、梅樹ノ如キ今日最モ普通ノ者ニシテ、此書ニ載セザル者ニ三アリ、殊ニ橘ノ元來外國ヨリ輸入セル者タルトヲ知ルベシ、本書第七十四段ノ傳説ヲ參考ス、又古代ノ日本人ハ、金石ノ種類ヲ區別スル

トニ注意セザリシ者ノ如シ、然レハ後代ニ至リテハ、稍、金屬ノ種類ヲ區別シ、各、其色ヲ取リテ以テ、其名稱ト為シタルト左ノ如シ、

黃金コカネ 金

白金シロガネ 銀

赤金アカガネ 銅

黒金クロガネ 鐵

唐金カラカネ 青銅

然レハ此等ノ金屬ノ中、太古ヨリ世用ニ供シタルニ疑ヒナキ者ハ、獨リ鐵ノニニシテ、コガネ、シロガネ、アカガネ金、銀、為本

目之炎耀種々珍寶ハ獨り遠西ノ朝鮮ニ在リト  
記載セリ又土ノ種類ノ中古事記ニ載セタル者  
ハ獨り赤土ノミ  
又色ヲ示ス語ノ中古事記ニ載セタル者ハ則チ  
左ノ如シ

黒色

青色 緑色ヲモ含  
ミテ云フ

赤色

駁色 馬ニ就  
テ云フ

白色

古事記ニハ黄色ヲ載セズ(根底國ヲ稱シテ黄泉  
ト云ヒタル所アレハ是レ漢語ニ取リタル者ナ  
ルハ黄色ヲ示ス語ノ中ニ加フベカラズ)又今日  
色ノ種類ノ細微ナル者ヲ示スニ各相當ノ語ア  
レハ古事記ニ之ヲ載セズ又青雲青海ノ語ハ古  
事記ニ載セタレドモ青天ノ語ハ古事記ニモ又  
其他日本ノ古書ニモ之ヲ載セズ然レハ支那ノ  
古書中ニ蒼天ノ語甚ダ多キハ奇怪ナリト謂フ  
ベシ

親屬關係ノ等級ヲ示ス所ノ名稱 此趣旨ハ經世  
學者ノ為ニ補

益少ナカラザルベテ詳カニ就テ論ズルニ現  
今日本ニ行ハル、親類ノ關係ヲ示ス所ノ等級  
ハ、歐洲ニ行ハル、所ノ者ニ比スルニ大抵相同  
シ、例ヘハ父、祖父、曾祖父、伯叔父、甥、繼父、繼子、義父、  
義子等ノ名稱、又母、祖母ノ如キ之ニ對シタル女  
子ノ名稱、又親、先祖、從兄弟、姊妹、親戚ノ如キ稍、泛  
然タル名稱是ナリ、唯其異ナル所ハ、兄弟姊妹ヲ  
以テ相互ニ同等ノ地位ニ居ル者ト看做サズシ  
テ、全ク支那ノ慣習ニ倣ヒ之ヲ二等ニ區別スル  
一事ニ在ルモ、

アニ兄  
オトウト弟  
アネ姉  
イモウト妹  
然レハ上古ノ時代ニ於テハ、此親屬關係ノ制度  
ノ一種錯綜シタル者行ハレタルガ如シ、此制度  
ハ朝鮮ニ於テ今尚行ハル、所ナレハ日本ニ於  
テハ、後世支那ノ思想ヲ輸入シ、殊ニ支那ノ文字  
ヲ輸入シタルニ因リテ、廢棄セシナリ、今古事記  
ノ章句中ニ假字ヲ以テ書シタル者ニハ、此制度

ノ痕跡ノ見ルベキアリ然レ其本義ハ日本ノ  
 學士ト雖<sup>レ</sup>殆ト其解釋ニ困却スル所ナレハ滿  
 足ニ此制度ヲ推知スルヲ能ハス且此制度ニ對  
 スベキ名稱ヲ英語中ニ求ムルニ唯 <sup>エルダ</sup>  
*and younger brothers, elder and younger*  
<sup>シスターズ</sup> *sisters* ノ四語アルノミニシテ他ニ之ニ對  
 スベキ者ナシ故ニ今爰ニ本居氏ノ古事記傳第  
 十三卷六十三四葉中ニ載セタル上古慣例ノ解  
 說ヲ引用スルヲ以テ適當ナリトス <sup>原書ニ脚註</sup>  
 ナラザルヲ以テ <sup>テ</sup>

まづ凡て古へは兄弟をいふは男弟女弟子對<sup>カ</sup>  
 へて男兄をせと云ひ、阿子と云ひ、又女兄子  
 對<sup>カ</sup>へて男弟をせと云へ、さて女弟子對<sup>カ</sup>へ  
 て女兄を「阿ね」と云ひ、又男弟のみづゝら女兄  
 を指して「阿ね」と云へ、さて男兄子對<sup>カ</sup>へて  
 男弟を「おと」と云ひ、又女兄子對<sup>カ</sup>へて女弟を「  
 おと」と云へ、さて男兄子對<sup>カ</sup>へて女弟を「  
 と云ひ、又男弟子對<sup>カ</sup>へて女兄をい」と云へ  
 且かくて又同母兄弟の間子てハ、世を「い」せ  
 「阿ねを」い「ね、おとを」いと「常子云へ、

夫れより子准ふるよ同母兄子對へく女弟をは  
「いろ」と云ひて決す(本居氏ハ他ノ處ニ  
「いろ」と云へル語ヲ解釋シテ愛ノ義アル「いろ  
ト同ジク親シニ愛クシム心アリト云へリ然  
レドモ余輩ハ敢テ此說ヲ信ズルヲ能ハズ  
是ニ由テ之ヲ觀レハ此親屬關係ノ制度ハ元來  
後ニ生レタル者ヲシテ先ニ生レタル者ニ從屬  
セシメ又女子ヲシテ男子ニ從屬セシムルヲ以  
テ義務ト為スニ在ルヲ知ルベシ蓋シ東洋(殊ニ  
其草昧ノ世)ニ於テハ所謂ル權利ナル者女子ニ

在ラカシテ男子ニ在ルナリ  
此他又注意スベキ事アリ古事記ヲ視ルニ嫡妻  
ト副妻トヲ區別シタル所ニ三處アレド(嫡妻ト  
副妻トノ區別ハ貴生ノ者ト賤生ノ者トノ區別  
ニ外ナラザルガ如シ)必ズシモ徹頭徹尾此區別  
ヲ守ラザル者ノ如シ加之常ニ妻ヲ稱シテ「  
ト云へリ實ニ此時代ニ於テハ妹妻ノニ語ハ互  
ニ相通用スル所ノ言語ニシテ日本文明ノ末世  
ニ猥褻トシテ惡ミシ所ノ風俗モ此時代ニ於テ  
ハ普ク國中ニ行ハレ余輩ハ屢上古日本人ノ異

父、姉、妹、異母、姉、妹、繼母、或ハ、伯叔母ヲ娶リテ妻ト  
為ス。トアルヲ聞クノミナラズ、一時ニ三人ノ  
姉、妹ヲ娶リテ妻ト為スノ陋習ノ如キモ亦當世  
ハ許認スル所ナリキ。然レ其後支那道德學ノ  
日本ニ行ハル、ヤ此類ノ婚姻ノ支那道德學ノ  
主義ニ背反スル者タルヲ認識シ、第一ニ之ヲ  
非難シテ猥褻非禮ナリトシ、日本ノ古俗ト支那  
ノ道德律トノ葛藤ヨリシテ終ニ政治上ニ爭乱  
ヲ醸成シタルヲアリ、本書第百四十一段以下輕  
太子ノ説話ヲ參考スベシ  
此説話ハ恐ラシク蓋シ此類ノ婚姻ノ中ニ姉妹ト  
ハ實事ナルベシ

ノ婚姻ハ、只神代ノ傳説中ニ之ヲ記載シタ  
ルノミナレバ、最モ早ク廢棄セラレタル者ノ如  
クナレ氏、異父兄弟、異母兄弟トノ婚姻ハ、正史年  
代ニ至リテモ之ヲ載セタレバ、尚後ノ世ニモ行  
ハレタルガ如シ、又支那ニ於テハ族外婚姻ノ制  
本族中ニテ女ヲ娶ル行ハレタレ氏、日本ニハ此  
ノ禁スルノ制ヲ云フ、行ハレタレ氏、日本ニハ此  
制ノ行ハレタル痕跡アルヲ看ズ、故ニ男子タル  
者其妻ヲ撰ブニ當リテ、別ニ制度ノ之ヲ妨礙ス  
ル者アラズ、且其新婦ヲ迎フル時ハ、是ト共ニ嫁  
資ヲ領收スルト間之アリ、



是ヨリ古事記ノ上部ニ散在シタル諸説ヲ参考  
シテ以テ古代日本人ノ生レテヨリ死スルニ至  
ル迄ノ大事ヲ搜索セザルベカラズ因テ先ツ上  
文ニ記載シタル産家ナル者ヨリ説キ起コスヲ  
必要ナリトス此産家ナル者ハ上文ニ述ブルガ  
如ク産婦ノ自ラ建築スル所ニシテ常ニ窓牖ヲ  
設ケザル者ナリ然ルニ赤子ノ始メテ日光ヲ視  
タリト云ヘルハ恐ラクハ矛盾ノ言ナルベシ既  
ニシテ子生マルレハ直チニ之ニ名ヲ命ジ(通例)  
其母ニテ名ヲ命ズ而シテ其名ヲ命スルニハ其

子ノ身ニ關係シタル事ニ取ルヲ以テ例トセリ  
又古代ニ於テ其言語ノ連合シタル者ヲ以テ人  
ノ稱呼ト爲シ人ゴトニ只一名ナリシ然レ氏正  
史年代ノ初メニ至リテ姓ト云ヘル者興リ又尸カネ  
ト云ヘル者興レリ但シ尸ハ臣下ニ著大ナル勲  
功ヲ奏スル者アル時其酬報トシテ國君ヨリ賜  
與スル所ノ者ナリ  
姓ヲ用フルノ慣習ハ支那ヨリ傳ヘタル者ニ  
疑ヒナシ然レ氏朝鮮人ニ於テハ支那ノ姓ヲ  
其儘ニ借り用ヒタレ氏日本ニ於テハ大ニ之

ニ變革ヲ加ヘシ所アリ尸ノ如キモ亦支那ノ  
感化ヲ受ケタル痕跡ナキニハアラザレ氏姓  
ニ比スレハ自然ニ日本ニ發生セシ所ナリ尸  
ノ屢載スル所ノ者ハ縣主アガタヌシ、朝臣アソリ、直君タケノミ、連臣ムラジ、宿  
禰トミ及ビ別是ナリ

又古事記ヲ讀ム者ハ上古ノ國君已ムヲ得ザル  
場合ニ處シテ乳母ヲ備用スルノ考案ヲ起コシ  
タルヲ知ルベシ又此乳母ノ外ニ湯母ナル者  
アリテ國君ノ子ニ陪從セシテ往々之アリ又日  
本紀及ビ古事記ヲ通覽スルニ余輩ノ今日所謂

ル睿知教育、身体教育ナル者ヲ載セズ唯男兒ハ  
適宜ノ年齢ニ達スレハ漁獵ノニ業ノ一ニ從事  
スルヲ載スルノミ又當時往々戰爭アリテ多  
クハ慘酷ヲ極メ戰爭ノ餘暇ニハ武人ハ田圃ヲ  
耕耘シテ以テ日ヲ消セリ又老人ヲ接待スルノ  
一事ニ至テハ懇切ニ之ヲ接待セシ痕跡ノ見ル  
ベキ者アレ氏詳カニ之ヲ知ルヲ得ズ  
婚禮ニ就テハ新婦ト其父ヨリ嫁資ヲ贈ルノ外  
ニ更ニ儀式アルヲ聞カズ當時婚禮ト稱スル  
程ノ儀式ハアラザリシ者ノ如シ中世ノ頃迄ハ

婚禮ト云へハ唯男女ノ其居ヲ同ウスルニ止マ  
 リ始メハ其同居ノ事ヲ秘密ニシ其後男子深夜  
 ニ徘徊シテ其婦ヲ訪フヲ止メ公然其婦ヲ其  
 父ノ家ニ誘引スルニ至リテ始メテ之ヲ許認セ  
 シナリ故ニ嫡妻副妻ノ名アル氏唯有名無實ナ  
 ルノミ又婦人ハ何時ニテモ之ヲ離縁スルヲ  
 得ベシ又婦タル者ハ夫ニ對シテ貞操ノ義務ヲ  
 守ラザルヲ得ザレ氏夫タル者ハ婦ニ對シテ守  
 ラザルベカラザルノ義務ナシ故ニ某神ノ妻曾  
 テ其夫ニ告グルノ歌ニ曰ク

上畧 阿我がお大ほ國く主よ主ぬ主い却ませ坐ば。

う打ち見み島る崎。しま崎の崎さ崎き崎ざ崎き崎か搔き見み見る磯。い磯ぢ磯の崎さ崎

き不お落ち弱ぢ草わ弱か草く草さ草の持つ妻ま持え持た持せ持ら持め持。阿我は我も

よ女。め女に女く女阿汝れ汝ば汝。か汝を除きて男。を無は無く無。か汝を除きて。

つ夫ま無は無な無く無云々本書第二十五段ノ第一

此暗昧ナル圖畫中ニ於テ獨リ余輩ノ目ヲ喜ハ  
 シムル所ノ者ハ夫婦暫ク別レシトスル時互ニ  
 其シク下シク紐結ヲ結心交ハスノ風俗是ナリ盖シ此風俗  
 ハ夫婦相別ル、間互ニ貞節ヲ守ラントノ意ヲ  
 表スルノ儀式ニ外ナラザルナリ、本書第七十一段ノ註解

ニフ参考又夫婦ノ離縁スル時其子ハ之ヲ如何  
スベシ措置セシヤ明カニ知ルヲ得ズタル者ヲ  
父ノ方ニ留ムルハ一例第四十二段ヲアレ正  
例ニアラザルガ如シ又養子ノ事ハ古代ノ傳説  
中ニ記載シタルヲ見ズ只後世ニ此事アルヲ見  
ルニ蓋シ養子ノ事ハ支那ノ風俗ヨリ借リ來  
タリシ者ト看做シテ適當ナルベシ  
人ノ臨終ノ際其景況及ヒ其時ノ談話ニ就キテ  
ハ余輩ノ聞ク所甚ダ少ク且爰ニ之ヲ詳説スル  
ヲ要ヒザルナリ然レモ葬式ノ如キハ更ニ緊要

ノ事ナレハ之ヲ詳説セザルベカラズ固ヨリ埋  
葬ノ際ニ行フ所ノ種々ノ儀式ニ就テハ明白ナ  
ル細説ヲ得ザレモ余輩ノ拾集シタル所ヲ以テ  
言ヘバ即チ左ノ如シ死者ノ住居ヒ茅屋ハ死  
後直チニ之ヲ破壊セリ夫ノ天皇即位ノ初メニ  
必ズ都ヲ遷スノ風習アルヲ見テ以テ此風俗ノ  
往昔ニ行ハレタルヲ明證スベシ又死者ノ屍  
骸ハ死後數日ノ間之ヲ喪屋ニ置キ其際生存  
セル者ニテ酒宴ヲ開キ死者ノ靈前ニ供ヘタル  
食物ヲ頒チシヲ載セタリ又生存セル者ノ哀

傷 悲歎ヲモ載セタリ又上古ハ尸體ヲ埋葬スル  
ニ木棺ヲ用ヒシガ後世石棺ヲ用ヒタリト云フ  
但シ石棺ヲ用ヒタル時代ハ垂仁天皇ノ御世ノ  
末ニシテ日本紀ノ年表ヲ是ナリトスレハ我ガ  
第一世紀ノ末ヨリ第二世紀ノ初メニ至ルノ間  
ニ在リ又他ハ古書及ヒ古生物學者ノ勤勞ニ因  
リテ發明シタル所ニ據レハ衣服粧飾物等ヲ屍  
骸ト共ニ埋葬スルノ風行ハレタルト明カナリ  
然レモ古事記中ニ此風俗ヲ載セザルハ甚タ奇  
怪ナリ是ヲ以テ知ルベシ苟クモ日本ハ古俗ヲ

寫シ出ダシテ十分詳悉ナラシメテ欲セハ何程  
貴ブベキモ專ラ一書ニハ信任スベカラザル  
又往昔帝王埋葬ノ時ニハ其家臣ヲ其君ノ陵  
墓ノ側ニ埋葬スルノ風俗行ハレシガ此頃之ヲ  
廢止シテ代フルニ土偶人ヲ以テシタルハ一美  
事ト謂フベシ讀者宜ク本書第六十三段ノ註解  
第二十三及ヒ第七十五段ノ註解第四ニ就テ其  
詳說ヲ知ルベシ  
若シ或ハ此殉死ノ風俗ヲ以テ人ヲ以テ犧牲ト  
為ス惡俗ノ部類中ニ入ルベキ者ト看做サンカ

然ルモ尚古代日本ノ風俗ヲ記シタル書籍中ニ  
於テ人ヲ以テ犧牲ト為ス惡俗ノ痕跡ノ存スル  
者ハ獨リ此風俗アルハミ又日本ニ於テ上古ヨ  
リ賣奴法ノ行ハレザリシハ一美俗ト謂フベシ  
然レモ仇敵及ビ罪人ヲ處置スルニ至リテハ其  
刑罰最モ慘刻ヲ極メ其爪ヲ拔キ其膝ノ筋ヲ斷  
リ其兩眼ノ隠ルニ至ル迄生ナガラ之ヲ地中  
ニ埋ムルト徃々之アリ又罪科ノ最モ輕キ者ト  
雖モ徃々之ヲ死刑ニ處セリ又罪科ヲ罰スルノ  
目的ヲ以テ人面ニ烙印ヲ押シ又ハ黥ヲ入ル

トヲ記載シタル所ニ三處アリ然レモ婦人ガ其  
眉ニ黥シタル所アルノ外ニハ他ノ目的ヲ為シ  
身體ニ黥セシトアルトヲ聞カザレバ此黥ノ罰  
法ハ元ト支那ヨリ日本ニ借り來レル者ナルト  
信ナルニ近シ  
此他ニ一醜俗ノ全ク默々ニ附スベカラザル者  
アリ則チ古事記ニ載スル所ノ極メテ厭フベキ  
醜惡淫亂ノ言行是ナリ固ヨリ禮儀ト云フ者ハ  
近世ニ興リシ者ナレハ野蠻ノ世ニ之ヲ冀望ス  
ベキニアラザレモ然レモ本書ノ第四段ニ載セ

タル明白ナル濁穢淫乱ノ行為伊那那岐伊那婚媾  
是ナ及ヒ英雄倭建命ヤマトタケノミコトト其妻美夜受ミヤウケ比賣ヒメトノ間  
ニ非常ナル趣旨(月經)ニ就キテ問答シタル歌第八  
考十七段ニ參ノ如キハ其猥褻ノ甚ダシキ群藉ヲ  
餘蘊ナク搜索スルモ更ニ其比類ヲ視ザル所ナ  
リ此他ニ又古事記中ニハ余輩ヲシテ最モ無法  
ナル罪惡ノ行ハレタルトヲ想起セシムベキ一  
章アリ本書ノ第九十七段  
趣旨ノ此部分ノ終尾ニ臨ミテ上古ノ日本人ノ  
知ラザリシ藝術産物等ヲ記載シ讀者ヲシテ彼

此ノ比較ニ供セシメシコト必要ナリトス抑上古  
日本ニハ茶ナク扇ナク磁石ナク又漆器ナシ實  
ニ後世日本ノ名産タル者ハ此頃一モナシ又此  
頃車ヲ用フルヲ知ラズ時ヲ計ルノ方法ヲ知ラ  
ズ貨幣ヲ用フルヲ知ラズ又鑿術ヲ知ラズ又稍  
價值アルニ三種ノ音樂及ヒ歌謠外國ノ歌謠  
テ(殊ニ)字句ヲ逐ヒテ之ヲ散文ニ翻譯シテ以テ  
十分ニ其意ヲ寫シ得ベキ者ニアラズ是レ譯者  
ノ困窮スル所ナリ然レ其二三ノ恋歌(例ハ  
本書第二十四段ノ第三歌及ヒ第二十五段ノ兩  
告(歌)及ヒ他ノ歌ニ三ノ情歌(例ハ倭建命ガ松樹ニ  
終ノ諸歌ノ如キハ譯者之詩歌體ノ形容潤色  
ヲ加ヘタレハ恐ラクハ讀者ヲ満足セシムル所

ア  
カ  
ヲ  
作  
ル  
ヲ  
知  
リ  
タ  
レ  
ル  
畫  
術  
ヲ  
知  
ラ  
ズ  
殊  
ニ  
最  
モ  
緊  
要  
ナ  
ル  
藝  
術  
ニ  
シ  
テ  
日  
本  
人  
ノ  
知  
ラ  
ザ  
ル  
者  
ハ、  
著  
作  
ノ  
術  
是  
ナ  
リ、  
抑、  
此  
事  
項  
ニ  
就  
キ  
テ  
ハ、  
誤  
解  
ヲ  
懷  
ク  
者  
少  
ナ  
シ  
ト  
セ  
ズ、  
殊  
ニ  
神  
道  
者  
流  
ノ  
熱  
心  
ナ  
ル  
者  
ハ、  
所  
謂  
ル  
神  
字  
ナ  
ル  
者  
ヲ  
贋  
造  
シ、  
之  
ヲ  
以  
テ  
日  
本  
ノ  
神  
祇  
ノ  
創  
製  
ス  
ル  
所  
ニ  
シ  
テ、  
支  
那  
象  
形  
文  
字  
ノ  
東  
傳  
ニ  
先  
ダ  
チ  
テ、  
日  
本  
ノ  
人  
民  
ノ  
用  
ヒ  
シ  
者  
ナ  
リ  
ト  
主  
張  
シ、  
歐  
羅  
巴  
ノ  
學  
生  
ヲ  
欺  
ク  
ヲ  
少  
ナ  
カ  
ラ  
ズ、  
然  
レ  
モ  
余  
輩  
ハ  
神  
代  
ノ  
傳  
説  
ヲ  
逐  
一  
穿  
鑿  
シ、  
又  
第  
三  
世  
紀  
ニ  
至  
ル  
迄  
人  
代  
ノ  
傳  
説  
ヲ  
モ  
逐  
一  
穿  
鑿  
ス  
ル  
ニ  
著  
作  
ノ

術、  
著  
作  
ノ  
具  
及  
ビ  
各  
種  
ノ  
文  
書  
ヲ  
載  
ス  
ル  
ヲ  
ア  
ル  
ヲ  
見  
ズ、  
實  
ニ  
亞  
細  
亞  
ノ  
大  
陸  
ト  
交  
際  
ヲ  
開  
キ  
シ  
頃  
迄  
ハ、  
何  
レ  
ノ  
書  
ニ  
モ  
書  
籍  
ノ  
名  
ヲ  
載  
ス  
ル  
ヲ  
見  
ザ  
ル  
ナ  
リ、  
其  
後  
亞  
細  
亞  
ノ  
大  
陸  
ト  
交  
際  
ヲ  
開  
ク  
ニ  
及  
ビ、  
シ  
テ、  
書  
籍  
ノ  
名  
ノ  
始  
メ  
テ  
顯  
ハ  
レ  
タ  
ル  
ハ、  
論  
語  
及  
ビ  
千  
字  
文  
ナ  
リ、  
此  
ニ  
書  
ハ  
應  
仁  
神  
天  
皇  
ノ  
御  
世、  
通  
用  
ノ  
年  
表  
ニ  
據  
レ  
バ、  
紀  
元  
二  
百  
八  
十  
四  
年、  
日  
本  
ニ  
傳  
ハ  
リ  
タ  
リ  
ト  
云  
フ、  
然  
レ  
モ  
千  
字  
文  
ハ  
元  
ト  
日  
本  
ニ  
傳  
ハ  
リ  
シ  
後  
二  
百  
年  
ノ  
頃  
ニ  
之  
ヲ  
著  
述  
シ  
タル  
者  
ナ  
レ  
バ、  
此  
傳  
説  
ト  
雖  
モ、  
年  
月  
ヲ  
豫  
想  
ス  
ル  
ノ  
弊  
ヲ  
免  
ズ  
ザ  
ル  
所  
アリ、  
是  
レ  
日



本歴史家ノ主張スル所ノ論説ヲ妄信スルノ僻  
アル者ノ殊ニ警戒セザルベカラザル所ナリ且  
「アストン」氏ノ既ニ指示シタルガ如ク日本語ノ  
「文」及「筆」ハ恐ラクハ外國語（即チ漢字  
ノ文・筆）ヨリ轉訛シ來ル者ナリト謂ハザルベ  
カラザル所以ノ者アリ

蓋シ余ガ説ハ「アストン」氏ノ説ト少シク異  
ナル所アリ「アストン」氏ノ説ニ據レバ日本語  
ノ「フ」ト朝鮮語ノ「フ」トハ各別ニ支那語ノ  
筆ヨリ由來セシ者ナリト云フト雖モ余輩ノ

考按ニ據レバ「フ」ハ支那語ノ筆ノ間接ニ朝  
鮮ヲ經テ由來セシ者ナリト思惟セリ或ハ又  
一步ヲ退キ朝鮮語ノ「フ」ハ支那語ノ筆ヨリ  
由來セシ者ニアラズトセンカ然ルモ尚「フ」  
ハ元ト日本固有ノ語ニアラズシテ朝鮮語ノ  
「フ」ヨリ由來セシ者ト謂ハザルヲ得不何ト  
ナレハ「フ」ト「フ」トニ語ハ兩國語ノ間ニ行ハ  
ル、所ノ文字轉換ノ定則ヲ嚴密ニ踐ム者ノ  
如シ而シテ又兩國人が筆ヲ表スルノ語ヲ作  
ルニ知ラズ識ラズ偶然ニ同一ノ根基ニ據ル



べき理由ナケレバナリ又「フ」ト云ヘル語ニ  
 至リテハ其支那語ノ文ヨリ由來スル「フ」信  
 ゼザル日本人ト雖氏數年前既ニ此事ニ説キ  
 及バリ又日本人ノ説ニテハ通例「フ」ハ「フ」ニ  
 (文)「テ」(手)ヨリ由來スト云ヘリ今姑ク此説ニ據  
 ルモ亦「フ」ニハ支那ノ文ヨリ由來セシ「フ」明カ  
 ナレバ「フ」デ「ト」云ヘル語ノ由來ハ尚之「フ」支那  
 ニ歸セザルヲ得ザルナリ  
 抑、神字ニ係ル問題ノ如キハ固ヨリ爰ニ議スベ  
 キ者ニアラズ日本學士中ノ最モ愛國心ニ厚ク

